

鐘さへ霞む日は閑に、眉を掠める雲は無いが、薄りとある陽炎が、ちらりと幻を淡く染めると、露地を入りかけた清葉は、風説の吾妻下駄と、擦違ふやうに悚然とした。

清葉は實際、途中でも、座敷でも、廊下でも、茶屋の二階の上り下り、箱部屋などでも、丁ど、袖袂の往通ひに、生きて居た頃の幽霊と、擦違つて知つたのであるから。

此處まで引添つたお千世は、家の首尾を見る爲か、あるじまうけの心附けか、ものも言はないで、一足前へ、袖を振つて驅出した。格子の音はカラ／＼と高く奥から響いたけれども、幸に吾妻下駄の音では無くて、色氣も忘れて踏鳴らす臺所穿の大な蹠音。それさへ頼母しい氣がするまで、溝板を辿れば斧の柄の朽ちるばかり、漫に露地が寂しいのである。

並んで四軒、稲葉家の隣家は目下空屋で、あとの二軒も、珍しく藝者家では無い。片側の待合の其の羽目に、薄墨でばかしたやうに、ふら／＼と、一所に歩行いて附いて來る影法師。

清葉は例の包ましやかに、色傘を翳して居た。其の影と分れたが、フト氣に成るので、其處で窄めて、逆上るばかりの日射を除けつゝ、袖屏風する如く、怪いと見た羽目の方へ、袱紗づゝみを頼にかざして、徐に通る襦はづれ、末濃に藤の咲くかと思つた。

さて音訪る、格子戸は、向うへ間を措いて、其處へ行く手前が、下に出窓、二階が開いて、縁が見える。

「お孝さん。」
と無遠慮に心易く、其れなり聲を掛けるのには——二人の間は疎遠でないが——いづれも名取りの橋の袂、雙方對の看板主、藝者同士の禮儀があるので。

一步とまつて、二階か、それとも出窓の内か、と熟と視めて、恚う、仰いだ清葉の目に、色絲を颯と投げたか、とはらりと映つて、稻妻の如く瞳を射つゝ、沈んで輝く光があつた。

驚いた鬢のほつれに、うしろの羽目板で、ちら／＼と一つ影が添つて、重つた蒼い影。

優しいながら、口を緊めて——透つた鼻筋は氣質に似ないと人の云ふ——若衆質の細面の眉を拂つて、仰向いて見上げた二階の、天井裏へ、翩然と飛ぶのは、一面、銀の舞扇である。

晃乎と光ると、扇は沈んで影は消えた。

……が、又翻つて颯と揚羽。輝く胡蝶の翼一尺、閃く風に柳を誘つて、白い光も青澄むまで塵を拂つた表二階。

露地も温室のやうな春の中に、其處に一人月の如き美人や病む。

扇に描いたは、何の花か、淡い繪具も冷たさうに、床の柱に映るのが見える。

落ちると、丁と幽な音。あの力なさは足拍子で無い。……壘に亡つた要の響。日ざしの白い静

かさは、深山櫻が散るやうである。

障子を左右に開け放して、見透かされたる其の座敷に、櫛子隠れの肩も見えず、欄干にこぼる

る裳も見えぬ。

お孝はまさしく寝て居るのである。

寝ながら、舞扇のお手玉して、千鳥に投げて遊ぶのであつた。

「あゝ、多日逢はない……」

清葉は、又可懐しさが身に染みた。……軒の柳の翠も浅い、霞のやうな簾一枚、ちき其處に、

と思ふのが、氣の狂つた美人である。……寝ながら扇を……

又飛ぶ扇、閃めく影、影に重る堀の影。

何故か渾名の(錦繪)に、魂の通ふ不思議な友に、夢現に相見る氣がして、清葉は軽く胸が轟く。

扱て恚う云ふも咄嗟の事。

直ぐに格子を音づれかけたが、歩みも運ばないで、立淀んだ。

清葉は途端に、内で、がみくくと喚く聲を聞いたから。

「遅いぢやないかね。」

と云ふ、嗚がれた中に痰の交じつた、冷飯に砂利を噛む、心持の悪い聲で、のつけに先づ一つ

くらはせた。

續いて、

「眞晝間、……お尻を振廻して歩行いたつて、誰も買手は有りはしないや。……鳶、鳶、」

と茶色な齒、尖つた口も見えろと思ふと、

「鳶につ、かれるくらゐが落なんだよ。何處、何、お茶、お茶、何處へお茶を買つて來、」

と一寸途絶える。

お千世は飴を買つたのに。

「何だ、飴だえ。私は又お前さんの身のものは、賣買ともにお茶だと思つた。……然う飴を、お

茶うけに、へ、む、」

と笑ひ上げたは、煙草を吹いたぞ。

「矢張りお茶に縁が有らあね、……世間ぢあお天道様と米の飯は附いて廻ると云ふけれど、お前さんにや、貫水とお茶がついて廻るんだ。お茶の水は本郷の名所だつけ。日本橋にや要らないもんだ。

え、姉さんのだ、嘘をお吐き。……否、姉さんが又吩咐けたつて、口ばかりさ、直ぐに忘れて、きよとんとして居る事は知つてるぢやないか。そして、食べさしちや悪いんだ。狂女に食も

のツてね、むしや、食散らかされて堪るものかな。
食べると水膨んだよ。……あの上水膨れちや、御當人より傍のものが助からないよ。人が乾殺しでもするやうに、陰へ廻つちや出過ぎたがる。姉さんも又、人聞きの悪いほど、何だ彼だつて食べたがる。精々何にも當飼はないで、咽喉腹を乾しとかないと、此の上また何かの始末でもさせられるやうぢや何うすると思ふんだ。」

清葉は睫毛に露を押へて、二階の陽炎の光るのを見た。——扇は澄まして舞ふのである。

十五

清葉は格子へ音訪れ兼ねた。

自分と露地口まで連立つて、一息前へ驅戻つたお千世を捉へて、面前喚くのは、風説に聞いたと違ひない、茶の罐を敲く叔母であらう。

悪戯兒の悪關係から、火の番の立話、小紅屋へ寄つたまで、一寸時間が取れて居る。晝間近所へ振賣だ、と云ふ。そんなお尻は鳶の突くが落だ、と云ふ。お茶と水とは附いて廻る、駿河臺に水車が架つたか、と云ふ。

お千世さんは私が一所に此處へ来たことを云つたのだらうか。……言つて、そして聞えよがしに、悪體を吐くとすると、私に喧嘩を賣るのか知ら。何の怨みも無いものが、煩ふ人の見舞に來たのに、如何に分らずやの叔母だと云つて、まさか然うした事ではあるまい。露地から急いで、……あのお千世さんが心づかひ、臺所から長火鉢、二階を股に掛けて、眼張つて居る、ものかも。姉さんは姉さんゆゑ、客に粗末の無いやうに、と先觸れに驅込んだ處を、頭から喚き立てて、あの妓が呼吸を吐いて、口を利く間も措かず、立續けて饒舌るらしい。

其れにしても、汚い口から出過ぎた悪體。お千世も同じ、藝者はお互ひ。筆がしらでも中軸でも一味についた連名の、晝蔭がお尻を突く、駿河臺の水車、水からくりの姉さんが、こゝにも一人と、飛込まうか。

それには用意がなければならず、覺悟もしないぢや出来まいが、自分へ面當なら破れかぶれ。お千世へだけの事だつたら、陰で綻を縫ふまで、と内氣な女が思直す。……

また其の時、異う悪黙りに黙つて了つて、ふと手の着けられぬまで、格子の中が寂寞して、薄氣味の悪いほど静まつた。

此ぞ、お千世の客が来て、門に近いのを、漸と嘯き得た事を領かせる。

「え、」

咳を優しくして、清葉が出窓際の柳の葉の下を、格子へ抜けようとする、と恰も其の時。

はらりと音して、寝ながら投げた扇が逸れたか、欄干を颯と掠めて、蒔繪の波がしら立つ如く、淺翠の葉に掛つて、月かと思ふ影が揺ぐと、清葉の雪のやうな頬を照らす。……と思はず、受けたは袱紗の手。我知らず色傘を地に落して、其の袖をはつと掛けて、斜めに丁と胸に當てた。

清葉は前刻から見詰めた扇子で、お孝の魂が二階から抜けて落ちたやうに、氣を取られて、驚いて、抱取る思ひが爲たのである。

潜つて流れた扇子の餘波か、風も無いのにさらりと靡く、青柳の絲の纏れに誘はれた風情して、二階にすらりと女の姿。

お孝は寢床を出た扱帯。寛い衣紋を迂るやう、一枚小袖の黒繻子の、黒いに目立つ襟白粉、薄

いが顔にも化粧した……何の心ゆかしやら——よう似合ふのに、朋輩が見たくても、松の内無いと見られなかつた——潰島田の艶は失せぬが、鬢のほつれは是非も無い。

生際曇る、柳の葉越、色は抜けるほど白いのが、淺黄に銀の刺繍で、此が伊達の、渦巻と見せた白い蛇の半襟で、幽に宿す影が蒼い。

十六

唯……思つたほどは寢れも見えぬ。

病氣の爲めに失心して、娑婆も、苦勞も忘れたか、不斷年より長けた女が、却て實際より三つ四つも少ないくらゐ、つひに見ぬ、薄化粧で、……分けて取亂した心から、何か氣紛れに手近にあつたを着散したらう、……座敷で、お千世が何時着る、紅と淺黄と段染の麻の葉鹿の子の長襦袢を、寢衣の下に棲淺く、ぞろりと着たのは、——豫ねて人が風説して、氣象を較べて不思議だ、と言つた、清葉が優しい若衆立て、お孝が凛々しい娘形、——宛然の其の娘風の艶に媚かしいものであつた。

お孝は弛んだ伊達卷の、ぞろりと投遣りの裳を曳きながら、……踊で鍛へた棲は亂れず、白脛のありとも見えぬ、蹴出揃きで、すつと来て、二階の縁の正面に立つたと思ふと、斜めに其處の

柱に凭れて、雲を見るか、と廂合を恍惚と仰いだ瞳を、蜘蛛に驚いて柳に流して、葉越しに瞰下し、其處に舞扇を袖に受けて、見上げた清葉と面を合せた。

「あゝ、お孝さん。」

と聲を掛ける。

上で見詰めたなり、何にも言はず、微笑むらしいお孝の唇、紅をさしたやうに美しい。

其處へ、あとも閉めないで置いたと見える、開けたまゝの格子を潛つて、顔を出したお千世は、一杯目に涙を湛へて居る。

亂れて咲いた欄干の撓な枝と、初咲のまゝ萎れむとする葉がくれの一輪を、上下に、中の青柳は雨を含んで、霞んだ袂を扇に伏せた。――

「清葉さんは樂勤め。」と茶屋小屋で女中が云ふ。……時間過ぎの座敷などは、(お竹藏)の棟瓦に雀が形を現しても、此の清葉が姿を見せた験が無い。……替りには、刻限までだと、何時に口を掛けても、本人が氣にさへ向けば、待つ間が花と云ふ内に、催促に及ばずして、金屏風の前に衣紋を露す。

但し約束は受けて居ても、參詣の歸途に眩暈がすると、其のまゝ引籠ること度々で。此の眩暈と、風邪と、も一つ、用達と云ふ斷りが出る、と箱三の札は、裏返らないでも、電話口の女中が

矢繼早の弓弦を切つて、斷念めて降參する。

座敷で口惜がるもの曰く、

「旦那が来て居るのだらう。」

勿論である。

時に説を爲すものあり。

「其のくらのなら商賣を止めれば可い。」

難じ得て妙だと思ふと、忽ち本調子の聲がして、

「藝者が好きな旦那でせうよ。」

一言簡潔にして更に妙で、座客ぐうの音も出ず愕然として此を見れば、蓋し三味線が、割前の

一座を笑つたのである。

然まで我儘が通る癖に、附合が綺麗で、朋輩に深切で、内氣で、謙遜で、もの優しい。おくれた座敷は、若い妓の後背に控へて、動く處は前へ立つて目立たないやうに取り廻す、と云ふのであるから、お茶屋の藏の前に目の光る古狸から、新道の峙を巢立ちの雛兒まで、

「あゝ、いゝ姉さん。」

とのつけに云ふ。……續いて頭を振る所科ありと知るべし。少いもの慌てまい。其の頭を振る

事たるや、今のは嘘だと云ふ打消してはない。

十七

向うへ對手に廻しては、三味線の長刀、扇子の小太刀、立向ふ敵手の無い、芳町育ちの、一步を譲るまい、後を取るまい、稲葉家のお孝が、清葉ばかりを當の敵に、引くまい、退くまい、と氣を揉んで、負けじとするだけ、豫て此方が弱身なのであつた。

張も、意地も、全盛も、藝も固より敢て譲らぬ。否、較べては、清葉が取立てて勝身は無い。分けて彼方は身一つで、雛妓一人抱へて居らぬ。

此方は、盛りは四天王、金札打つた獨武者、羅生門よし、土蜘蛛よし、狒々、狼も以つて來なで、萌黄、緋緘、卯の花緘、小櫻を黄に返したる年増交りに、十有餘人の郎黨を、象牙の撥に從へながら、寄すれば色ある浪に碎けて、名所の松は月下に獨り、從容として名を得る口惜しさ。弱蟲の意氣地なしが、徳とやらを以て人を懐ける。雪の中を草鞋穿いて、蓑着て揖讓するなご、惚氣で鍋焼を奢るより、資本のか、らぬ演劇だもの。

「字は玄徳め。」

と、所好な貸本の講談を読みながら、梁山泊の扈三娘、お孝が清葉を罵る、と洩聞いて、

「其の氣だから、あの妓は、(そんけん)さ。」

と内證で洒落た待合の女房がある由。

却説、言ふが如く、清葉の看板は瀧の家に唯一人である。母親がある。其は以前同じ土地に聞えた老妓で、清葉は其の實、養女である。學校に通ふ娘が一人。これには表むき、おつかさん、とおほびらに自分を呼ばせて、誰に、遠慮も氣づかひも無い。

尚ほ水菓子が好きだと云ふ、三歳に成る男の兒の有ることを、前の條に一寸言つたが、此は特に斷つて置く必要がある、捨兒である。夜半に我が軒に棄てられたのを、拾ひ取つて育てて居る。其の兒に乳母を選んで、附けて置く裕な身上。

土藏がある、土藏には、何かの舞に使つた、能の衣裳まで納まつたものである。

嘗て山から出て來た猪が、年の若さの向う不見、此の女に戀をして、座敷で逢へぬ懷中の寂しさに、夜更けて瀧の家の前を可懐しげに通る、と其處に、鍋焼が居た。荷の陰で引飲けながら、フト其の見事な白壁を見て、其の藏は？

「瀧の家で。」

「たきの家？」

「へい、清葉姉さんの家でですよ。」

や、これを聞くと、雲を霞と河岸へ遁げた。然も霜冴えて星の凍てたる夜に、其の猪が下宿屋の戸棚には、襲ねる衾も無かつたのであつた。

と、何の苦勞も、屈託も無さうな其の清葉が、扇子とともに、身を震はした。

「お千世さん、姉さんが。」

と、二階にゐるで物言はぬお孝を、其の妹に教へながら、お千世の泣顔を、ともに誘つて、涙ぐんだ目で欄干を仰いで、

「私、……私よ、お孝さん。」

と二度目に呼んで聲を掛けるや、

「葛木さん。」

と、冴えた聲。お孝が一聲應ずるとともに、崩れた襖は小間を落した、片膝立てた段鹿の子の淺黄、紅、露はなのは、取亂したより、蓮葉とより、藥玉の總切れ々に、美しい玉の緒の纏れた可哀を白々地。萎えたやうに頬杖して、片手を白く投掛けながら、

「葛木さん。」

二度まで、同じ人の名を、此處には居ない人の名を、胸を貫いて呼んだと思ふと、支へた腕が

溶けるやうに、島田鬚を頂せて、がつくりと落ちて欄干に突伏したが、忽ち反り返るやうに、衝と立つや、踉蹌々々として障子に當つて、亂れた袖を雪なす腋で、緊乎と胸にしめつゝ、屹と瞰下ろす目に凄味が見えた。

「あゝ。」

「危いわ、姉さん。」

端近な低い欄干、虹が消えさうな立居の危さ、と見ると、清葉が落した色傘を拾つて居たお千世が、小脇に取つたまゝ慌しく驅込んだは、梯子を一飛びに二階へ介添。

「何だい、盗人猫のやうに、唐突に。」

と摺違ひに毒氣を浴びせて、ぬつと門口を覗いた、遣手面の茶罐阿婆。

「えへ、。」と笑ふ、茶色な前齒、金の入齒と入亂れて、窪んだ頬に白粉の残滓。

「まあ、瀧の家のお姉様、何うぞ此方へ。……まあ、御全盛な貴女様が、こんな怪物屋敷見たやうな處へ、まあ、何うした風の吹廻しで。」

清葉はきり、と、扇子を疊んで、持直して、

「一寸、お茶を頂きに。」

河童御殿

十八

「は、あ、葛木ですかね、姓ぢやね、苗字であるですね。名は何と云はる、ですか。」
「晋三です。」

上外套を着ながら、尙ほ蒲柳の見える、中春の男が答へる。

三月四日の夜の事であつた。宵に小降りとした雨上り、月は潜んで朧、と云ふが、黒雲が浸んで暗い、一石橋の欄干際。

一方は口つきでも知れる、言ふまでもなく警官である。

「新は何う書くですかね、……通例新の新ですか？ 或は。」

「晋と云ふ字です。」

と男は聲を低うした。こゝに事故ありと聞きつけて、通行の人集りを憚つて、然り氣なく知合が立話でもする如く装はうと爲たらしい。

然して氣遣ふ事は無い。近間に大なる建築の並んだ道は、崖の下行く山道である。峰を仰ぐもの

は多いけれど、谷を覗くものは澤山ない。夜は特更往來が少い。然も、其の夜は、丁ど植木店の執持薬師様と袖を連ねた、こゝの縁結びの地藏様、實は延命地藏尊の縁目で、西河岸で見初て植木店で出来る、と云つて、宵は花簪、蝶々鬘、やがて、島田、銀杏返、怪しからぬ圓鬘まじり、次第に髷の出た、襟脚の可いのが揃つて、派手に美しく賑ふのである。それも日本橋寄から仲通へ掛けた殷賑で、西河岸橋を境にして此方の川筋は、同じ廣重の名所でも、朝晴の富士と宵の雨ほど彩色が變つて寂しい。尤も此一石橋の夜の御領主、名代の河童が、雨夜の影を潜めたのも、漸つと五六年以來であるから。

初夜も過ぎた屋根越に、向う角の火災保険の煉瓦に映る、縁結びの紅い燈は、恰も奥庭の橋に居て、御殿の長廊下を望んで、障子越の酒宴を視める光景！ 島田の影法師が媚めくほど、尙ほ世に離れた趣がある。

偶にこぼれて出て来るのは、小姓梅之助に手を曳がる、腰元の青柳か、密と外して酔ぎましたの椎茸髷。いづれも人目を忍ぶ色の、悪くすると御手討もの。巡查と對向に立つたのなんぞ、誰も立停まつて聞くものは無い。

夜は、間遠いので評判な、外濠電車のキリ／＼軋んで通るのさへ、池の水に映つて消える長廊下の雪洞の行方に擬ふ。

橋本日

が、名を憚つた男の、低い聲に、(あゝん)と聞えぬ振して、巡査が耳を傾けたのは、故とらしく意地悪く見えた。

「すゝむ、所謂、進歩ですかね。」

「否——高杉晋作の晋なのです。」

と向直る。

巡査の背がぐつと伸びて、じろりと行つて、

「維新創業の名士、長州第一の英傑ぢやね。あゝ、豪い名前でありますな。ふん。」

「親がつけたんです。」

と、苦笑したらしい。

「成程、大きに其處もあるですね。」

と取つても附けない氣振をしながら、

「で、晋三の藏の字は?……いや、名刺をお持ちぢやらう、と考へるですがね。」

「確か……有りました。」

爾時、角燈を燧と見せると、其手で片手の手袋を取つて、目前へ、づい、と掌。目潰もくはせる構。で、葛木といふ男は、ハツと一足さがつた。

「差上げますので?」

「何、拜見をしますので、はあ、あゝ。」

十九

巡査は、持替へた角燈に、頬骨高く半面暗く、葛木の名刺を指の股に挟んで、

「此は非常に皺に成つとる名刺ぢやねえ。」

「つい突込んで置いたもんですから。」と袖の下に、葛木は其名刺入を持つて居る。

「あゝ、非常に大事の物と見えるですね。」

巡査は鼻の先でニヤリと薄笑。

此の意味が受取れなくつて、

「えゝ?」と云ふ。

「深く其の、囊底に祕して置くですね。」

「何、然う云ふ次第では無いんです。いけ粗雑なんです。」

「粗略に扱ふですか。故とですかね、名刺を。」

「故と、と云ふのぢやありません。皮肉ぢやありませんか。」

「敢て然うで無いです。が、貴下の言語が前後不揃であるからぢやね。」
「何が不揃です。」と一寸忙込む。

「お黙りなさい。」

と、低い唐突に一喝して、けろりと又静に、

「反問をすることは要らんです。……唯、質問に對して答へれば可いのです。」

ぐい、と名刺入を突込んだが、葛木は事を好まぬらしく、其のまゝ黙る。

「早願ひたいのです。」

「順序があります。——一體此の名刺はですな、……更めて尋ねるですが、確に、此は貴下ので

すな。」

「名が書いてありませう、葛木晋三と。」

「本郷駒込が住所で。」

「相違ありません。」

「すると……皺だらけに成つた、此の一枚而已ではありますまい。他に幾枚か持合せがありません。

う、有る筈ぢやがね。」

「はあ。」と、浮りした返事をする。

「其をお見せに成らんけりや不可んね。」

「生憎、持合せがありません。」

「無いと云ふ法は無い。有る可きですな。」

葛木は、此さへあれば、何事もない、と自覺したのに、實際無いのを口惜しさうに、も一度名

刺入を出して、中を苛立つて搔廻したが、

「眞個、一枚に成つて居たのです。」

「成程……非常に交際がお廣いですね。」

「否、狭いんです。」と投げたやうに言下に答へる。

「こゝに醫學士、と記てあるですな。」

「巡査は魔を射る赤い光を、葛木の胸にびたり。

其の髻の薄い顔を照した。

「お職掌がら、特に御交際の狭いと云ふのは、……ですな。何故ですかね。」

「開業は爲て居らんです。」

幾干か、頷いたらしかつた。と更まつた態度で、

「何處へお歸りですな。」
「學校へ。」

「何、」

「……其寄宿へ歸ります。」

「は、あ、學士の寄宿舎が。其は唯今ありますか。」

「醫局に居ります。」

「今時分。」

「其處に寢泊りをするんです。」

「すると、此の駒込千駄木は？」

「籍が有るんです。」

「何故ですか、籍だけお置きに成るは、……ですね。」

「妹の縁附いた家なんです。」

「御令妹の、ふん。」

と、一つ呼吸を入れたが、突附けた燈も引かず。

「で、唯今まで、何處においでで有つたのかね。」

「此の邊に、一寸飲んで居りました。」

其處へ、二人ばかり通抜けたが、誰も立停つても見なかつた。

二十

「何屋です、何屋ですかね。」

「……其は言はなければならぬでせうか。勿論、是非と申すんです。」

「いや、其は先づ。……然し御愉快でしたな。」

「何、苦痛です。」

と向を替へて、欄干に凭れて云ふ。……

「苦痛、……成程。道理で、顔色が非常に悪いな。」

忽ち亂暴な言語しながら、横ざまに其の瘦せた形を照して、

「眞蒼ぢやね、は、は。」

と笑棄てたが、底に物ある、薄氣味の悪い事。

其の時間えた。絲より細い忍音の……

——露地の細路、駒下駄で——

「あゝ……可厭な……姉さん。」

と若い女の聲がすると、かたくと驅出す音、呉服橋を、や、離れた辻のあたり。薄墨色の河岸を傳つて、雲より黒い線路に響いた。トも一人笑つた女の聲。悪巫山戯に威したらしい。楚音は續いて響く。

葛木は撈るやうに顔を撫でて、

「蒼青ですか。……然うですか。客が野暮だから、化物に逢つた歸途でせうよ。」

「其は、唯今の其は、苟も行政官の一員たる、即ち本職に向つての言語であるのですね。」

「否、實は性分です。」

と焦つたさうに言ひ切つた。葛木は衝と行かうとした。表裏、反覆、兎に角ながら、對手が笑つたから、話は濟んだ、と思つたのである。

「お待ちなさい、お待ちなさい。待たんか、おい。」

「何です。」

「づか／＼行つちや不可んぢやないか。尋問は此からなんだ。」

「僕は帽を取るよ。更めて挨拶をします。可い加減にしくつちや困るぢやありませんか。夜分、我々が通行するのに、恚う云ふ事は間々あります。迷惑でも御職務に對して敬意を表する。其に

してもです。唯今までさへ、立入過ぎたお尋ねの被成方ですが、單に御熱心であるからだ、と思つたんです。

此の上何を聞くんです。眞個可い加減にして下さい。……用が有るなら住所へお尋ねを願ひませうか知らん。」

「然やう、當方の都合に因つては住所へもお尋ね出來ます、又……都合によつては、本署へ御同行も出來得るですであらう。」

「えゝ。」

有繫に葛木は一驚を喫した。餘の事である。

「雖然、御答辯に依つて、其處までに立到らない事を、紳士のために、本職は欲するでしてな、はあ、あゝ。」

「早くお尋ねを願ひます。何です、兎に角、困りました。僕は不安に堪へません。」

「すると、寧ろ此處で埒を明ける事を御希望に成るのですね。」

「勿論、是が非でも連れて行かうと思へば、其が出來ない貴下ぢやないんだから。」

「然やう。然らば反抗をなさらんで、柔順にお答へをなさるが可い。」

と入交ひに成つた向を直して、巡査は半身を反るが如く、肩を聳やかして衝と又角燈を突付け

た。

葛木は、其の忌はしさと、痲癩にぶる／＼する。

「貴下は太く其の顔色が悪いですね。」

「……寒いのです。」

「寒い！ 化物に逢つたのが、性分に成つて、而して今は寒い。いろ／＼に變化しますな。」

「まあ、君は、と、足踏で橋を刻んで焦れると、

「御都合で署へ御同行を願つても可いのです、が、御答辯によつて、其れまでに立到らない事を、紳士のために希望しますでなあ。」

「……………」

榮螺と蛤

二十一

「何にしろぢやね、本職の前で顔色が悪うて、震へて居らるゝのは事實ぢやね、其は併し寒いでも構はんです。」

其の寒いのにぢやね……先刻から、水に臨んで、橋の上に、此處に暫時立つて居たのは、ありや何う云ふわけですか。

勝手だ、酔覺しぢやと言はるゝかも知れん。雖然ぢやね、見て居つたぞ、どぶん！ と音のし

た……………」

水の面は暗かつた。

「どぶん。」

ぎり／＼と靴を寄せつゝ、

「川の中へ放棄し込んだ、……確に、新聞紙に包んだ可なり重量の有るものは、あれは何ですか。」

「あゝ。」

前の世の罪でもある事か、と自ら危ぶみ、惶れ、惑ひ、且つ怪んで居た葛木は、餘りの呆氣なさに却つて驚いたのである。

「其の事ですか。」

「先づそれを聞かんならんですね。」

「あれは榮螺と蛤ですよ。」

此が又少なからず這個行政官を驚かした。……其の答が餘り簡單で明瞭で加に平凡であつたから。……雖然、此の場合の平凡たるや、世間の名詞は、巡査のためには盡く、平凡であつたらう。

巡査に取つては、魚河岸の俠男が身を投げたよりは、年の少い醫學士と云ふ人間の、水に棄てたものは意外であつた。

「榮螺と蛤」

問返す、鼻柱かけて著しく眉を擡めて、疑惑の眼は異變に光る。

「貝類の……です」

「いや、其は否、其は然しながら初めは妖怪の符牒でもあるかに聞いたですが、再度繰返して説明をされたで、貝類である事は分つたです。分つたですが、……貴下は妙なものを棄てましたなあ。」

「放したのです、私は、」

「成程、で其は禁厭にでも成るですかね。」

「……雞に、雞壇に供へたのを、可哀相だから放したんですよ。」

「は、あ、或は煮、或は焼いた奴を。」と、故と空惚けた事を云ふ。

うっかり引入れられさうだつた。が、對手が巡査である事に、彼は漸く馴れたのである。

「生のまゝですとも。」

「何等の目的ですかね。」

「目的は有りません。」

「人間が、紳士が、苟くも學士の名稱御所有の貴下が、目的なしに、目的なしに事を行ふと云ふ理由はあるまいかに考へるですね。」

醫學士は思はず激した。

「根、根掘り葉掘り。」

「御都合に因ればです、本署へ御同行を願ふことも出来るです。が、紳士として、御名譽の爲にですな。」

「分つた。……分りました。が、別に目的と云つては無い。可哀相だから其でなんです。」

「……蓋し非常な慈善家でありですな。成程、所謂、醫は仁術であるですかね。」

「私は敢て、敢て仁者とは言ひますまい。妹の、姉の。」

「あ！」と一つ握拳を口に突込むが如く言を遮る。
ト稍しどろの體で、

「姉さんの志です。」
「姉さんの志。は、あ、君は姉のために、嬰兒を棄てたんぢやね。」
「何！」

二十一

「前刻には御令妹であつたかに、あ、本職は記憶するですな。」
「然うです、然うなんです。」
「何か、年上の妹かね。」
「否、姉です。」
「答が明瞭を缺いてて不可んねえ。……爲に成らんぞ、君。」
「ですから僕の妹です。」
「は、は、駄目ぢやね、君、何うも變ぢやね。」
「何が變ですか。」
「都合に因つては本署へ、ですな。」
「馬鹿を仰有い！」

「けれども、紳士のために、敢てそれは望まんですなあ。」
「實に、貴下は。」
「誰が雛を飾つたのですか。」
「其は僕だ。」と赫となる。
「おい、」
と云ふ語調が變つて、
「確乎答辯をせんと不可んねえ。君は、今しがた、……某大學ですかね、病院に寄宿をすと言つたでは無かつたか。……大學、病院の宿舍内で、雛を飾つて遊ぶのですな。榮螺、蛤を供ふるですな。」
「如何にも。」
「事實は、……本職が、貴下を疑ふよりも、寧ろ奇怪ぢや無いですか。」
「其が姉の志ですから。」
「御令妹は、」
「妹は縁附いて、千駄木に居るのです。」
「分りました。」

はじめて僅に頷きながら、

「姉と云ふのは、ですな。」

「其まで、そんなことまで凡て言はなければ成らんですか。……詮方がない、災難と思ふ……御都合に因つては、それは何處へもお供をする。が、打明けてお聞かせ下さい。一體、何から起つたお疑ひなんですか。」

「聞かせませう。川へお棄てに成つたものを、明かにお話しが願ひたい?……」

「其は、」

「は、矢張り(榮螺と蛤)か、其奴は困りましたな。」

「お信じ下さらない。」

「強ひて信じたくないとは願はんのです、紳士のために。何爲、那樣なら貴下は、其の新聞包み

を棄つるに際して、きよろしく四邊を眊したり、胡亂々々往來をしたんぢやね。」

「そりや何です、人が怪みはしまいかと思つたからです。」

「は、あ、人が怪むと云ふ事を。それぢや……御承知であつたですな。」

「ものが、ものだからですから。」と大にまごつく。

「何も貝類を川に棄つるに、世間を憚る事は無いやうに思はれる……ですな。」

「ですが、……又……貴下のやうな。」

「すると、本職がです、警官が其を怪む事は御承知の上ですか。」

「僕には分らん。」

「本職はです、貴下のために御答辯の拙劣なのを惜むです。」

「……勝手にし給へ。何うしようてんだ。」

「……紳士のために望まない事ですな。」

「煩い、勝手になさいよ。」

「爲に成らんぞ!」

「旦那。」

と暗がりにも媚かしく婀娜な聲。ほんのりと一重櫻、カランと吾妻下駄を、赤電車の過ぎた線路に遠慮なく響かすと、はつと留楠木の薫して、臍を透した霞の姿、夜目にも棲を咲せたのは、稲葉家のお孝であつた。

—— 一昨年の春である ——

おなじく妻

二十三

「もし、一寸。」

右側の欄干際に引添った二人の傍へ、すらりと寄つたが、お端折の袂を取りたさうに、左を投げた袖ぐるみ、手をふらくと微酔で。

「旦那、其方のお検べはまだ済みませんか。」

と斜めに警官を見て、莞爾り笑ふ……皓齒も見えて、毛筋の通つた、潰島田は艶麗である。警官は二つばかり、意無味に續けざまに咳した。

「お前は何かい、あ。」

「はあ、お次に控へて居りました、賤の女でござんすわいな。」とふらくする。

分つたか、分らないか、別に心にも留らない様子で、

「何が故に、あ、出チ来たかい、うむ？」

「唯々、御意にござりまする。」

と妙に可愛い聲して、

「此のお方の、」

流眊に、ト心あつてか葛木を優しく見ながら、

「お検べが済みませんと、後が支へますのでござんすわいな。」

「何が支へる、何が。」

「だつて——あ、焦つたい。此方は何ぢやありませんか——御姉さんの志だつて、お雛様に御馳走なすつた、お定りの(榮螺と蛤)——」

でもお儀式よ。それを貴下、川中へお放しなすつたつて、其がでせう、怪しいつて事なんでせう。

もし、榮螺も蛤も生きて居ますわ。中でもね……お雛様に飾つたのは、ちらく蠟燭の煮えま

す時、春雨の静かな晩は、口を利くものなんですよ。クク、

と酸漿を鳴らすか如く、

「なんて。——可哀相に、蒸したり焼いたり出来ませつかつて貴下——おまけにお雛様んでせう——此の方の心意氣は、よく分つてるぢやありませんか。」

私だつて放しに來ました、見て下さいな。」

片手を添へて、捧げたのは、錦手の中皿の、半月形に破れたのに、小さな口紅三つばかり、裡紫の壺二個。……其の缺皿も、白魚の指に、紅猪口の如く蒼く輝く。

「あら、小さいんで極りの悪い事ね……お價が高いもんですから、賤の女でござんすわいな。ほほ、ほ。」

桃の花片其處に散る、貝に眞珠の心があつて、雛を懷ふ風情かな。

「お座敷歸に、我家の門から、奴に持たして出たんですがね。途中で威かしたもんだから、押放出して遁げたんですもの。ヒヤリとしたわよ、眞二つ。身上大痛事。此を拾ふ時の拙者が心中、心持と云ふものは、御兩所、御推量下されい。

其でも、孝の字大達引。……ねえ、そんな思ひをして迄だつて、放しに來たんぢやありませんか。ねえ、現在。」

と左右を見つゝ、金魚鉢を覗く如く、仇氣なく自分も視めて、

「お分りになつて、旦那。……お許しを受けないと、又叱られると成りません……最う可いでせう、一寸、放しますよ。」

「巡查の、ものも言はない先、つかくと欄干越。」

「一石橋に桃が流れる。どんぶりこ。」

ばつと鳴つて、どどんと水の音。

両手を縫つて、肩を細く乗出しながら、

「河童や、悪戯をおしでないよ。」

向う岸に驚が居て、雲はや、白く成つた。

「失禮しました。」

名刺を返して、

「悪しからず……お名前だけ記憶します。」

と、鉛筆で手帳へ其の名を。……振向くお孝に見向つて、

「お前の名も？……何と云ふかい。」

「おなじく妻、とかいて頂戴。」

二十四

「實に難有かつた、姉さん。」

「巡查の靴音が橋の上に留んで、背後向の其黒い影が、探偵小説の挿畫のやうに、保險會社の鐵

造りの門の下に、寂しく描出された時、歎息とともに葛木は然う云つた。

「お庇さまで助かつたんだよ。」

「恐入ります、御慰撫で。」

並んでイんで見送つて居たのが、微笑んで見向いてお孝。

「でも、驚いたでせう、貴方。」

「驚いたつて、はじめは申戯だと思つたし、半頃ぢや、故と意地悪くするんだと思つて癢にも障りましたがね、段々眞面目なのに氣が付いたんです。確に嬰兒でも沈めたと思つたらしい。先方が職務に忠實なんだと氣がつくほど、一度は警察か、と覺悟をしてね——まあ、しかし其でも活きた證據に、同じものの放生會があつて、僕が放生會に逢つたやうだ。で、眞個に不思議な位だ。」

「私は毎年放すんですわ。」

「それにした處で、丁ど機會よく、……私は姉の引合せか、と思ふ。」

「御馳走様。」

と横を向いた、片頬笑みの後毛を、男に見せて、婀娜に拂ひ、

「清葉姉さんの、でせう一寸。」

「え、？」

「お驕んなさいよ、葛木さん。」

「驕る。……そりや屹とお禮をするがね、何うしてお前さん、私の名を。」

「知つて居ますよ。」

吾妻下駄をからりと鳴して、摺下る袴を上衣の下に直した氣勢。

「今お歸り？ 清葉さんの葛木さん。」

彼は退いて片手を振つた。

「止してくれ、先方が迷惑をするんだから。」

「酷く御謙遜ね。」

「否、眞個。」と、慌しく中折をぐいと被る。

お孝は覗くやうにしながら、

「それとも、此からお出掛けなさるの。……宵にして下さいよ。然うでないと、私たちが見たくつても廊下で御目に掛れない。」

「申戯を云つちや困る……此から行つて逢へるやうなら、橋の上で巡査に捉まる、そんな色消しは見せやしない。……」

なんのツて暢氣らしく云ふけれども、實際行掛けに流した方が無事だつた。雀と違つて、もの

がものだし、一寸嵩は有るしするから、宵の人目を憚つたのが、蟲が知らしたのかも知れんだね。眞個に此から歸るんだよ。」

「ぢや、矢張りお歸りがけね、お待ちなさいよ。」

と拔出て居た簪を、反らした掌で、スツと留めて、

「然うね……姉さんの御志で、お雛様の榮螺と蛤を、一石橋から流すと云ふのに一人ぼつち。

それまで檜物町に差向ひで居た藝者が、一所に着いて來ない意氣ぢや、成程出來て居ませんね。」

「勿論。」と外套の襟を立てる。

「それぢや風説の通りだよ。」

「や、専ら風説をするのかい。」

「評判さ。お前さん。」

「其は聊か情ない。」

「意氣地なし……」

と袂を投げた手を襟に、眉を明るく屹と見て、

「男の癖に。」

「此は手酷い？」

二十五

「だけでも、可い氣味ねえ。」

「何の怨みだね。」

「可いもの好みをするからさ。」

「相濟みません。」

葛木は寂しく笑つて、

「猛烈なる事巡查以上だ。」

「處へ……私でなく、清葉さんに出て貰ひたかつたわね。」

「其の人でさへ、可いかね、都合のいゝ時で無いと、容易に顔も見せちやくれぬ……」

「澤山よ。」と一轉と背後向く。

「否、見得も外聞も無しにさ。分けて、お前さんは全盛だ。名だけは評判で聞いて居る。……此

の頃に一度挨拶、と思ふけれど、呼んでも……一寸ぢや見えんのだらうな。」

「見えるも見えないも、葛木さん、御挨拶なんて要るものですか。」

「屹と然う云ふだらうと思つた。勿論、たかく更めて、口で云ふ禮ぐらゐる。」

「却つて迷惑。」

「御迷惑。」と口も足も、學士は蹴躓いたやうであつた。

お孝は澄まして、

「え、眞平。」

「それぢや時節を待つて下さい。」

「可厭です。」

學士は決然たる態度で、一寸帽を取つて、

「名は忘れませんよ、いづれ。」と二ツ三ツ塵をはじきながら、附穗なく線路を斜めに、見えない電車に追はるゝ如く。

唯顧みて、其處で、ト被直して、杖をついた處、お孝は二つばかり、カラ／＼と吾妻下駄を踏鳴らした。

「唯別れるの。……不意氣だねえ、——石橋の朧夜に、」

四邊を見つゝ、袖を合せた、——雲を漏れたる洗髪。

「女と二人逢ひながら、すたく／＼(かねやす)の向うまで、江戸を離れる男ツてのがお前さん江戸にありませんか。人目に然うは見えないでも、花のやうな微酔で、こゝに一本咲いたのは、稲葉

家のお孝ですよ。清葉さんとは違ひますわ。」

「違ふから、其だから、」

學士は、つか／＼と引返して、

「尙の事、忙しくつて、逢つてはくれまいと言ふんぢやないか。」

「え、然うよ、……違ひますとも。……清葉さんと違ふのはね、今時分から一人ぢや貴方を歸さない事なのよ。」

「お孝さん。」

「葛木さん、もう遅いわ。……電車も無し…………巡查に咎められたりなんかして、こんな時はつけが悪い、山の手の夜道だもの、無理をすると追剥が出来ますよ。」

「尤も、直ぐにも、挨拶も爲たいんだけど、遅い、ね、何しろ遅いから何處と云つて……私には働が無いのでね。」

「附いてるのが私です。——箱を出たお嬢さんだわ、お座敷は何處にでも。……一寸……一所に行らつしやいな。」

と取つて引いた外套の脇を離すと、トンと突いて、ひらりと退くや、不意に踏躓めく葛木を、すつと立つて、莞爾見て、

「其時、屹と御挨拶なさいまし。ほ、ほ。」
と花やかなものである。

「姉さん。」と抱附くやうに腰にひつたり、唐突に驅寄つたは、若い妓の派手な態度——當時一本に成りたてだつた、お孝が祕藏のお千世なのである。

「まあ、千世ちゃんか、……あ、吃驚するぢやないか、ねえ。」

二十六

「だつて、姉さん。」

「姉さんぢやないよ、……唐突に何だねえ、お前、今しがた河岸の角から驅出したぢやないか。」

——露地の駒下駄——は、此の婦で、怯えた聲は其の妓であつた。

「緩り歩行しても追着いて来ないから、内へ歸つたらうと思つたのに。」

「だつて、姉さんが威すんですもの。私吃驚して遁出しましたけれど、（お竹藏の前でせう、一人ぢや露地へ入れませんもの、可恐くつて、私……）」

「煙草屋の小母さんに見てお貰ひなら可いものを。」

「最う閉りましたの。」

と、小腰を屈めて、欄干の上で、ふつくりした髪を庇つた透して見る手、——橋の側は……變つて居た。

「……覗いたけれども、眞暗で、最う寝たんですもの。」

「それで何かい、また出掛けて来たのかい。」

「え、一人ぢや可恐いんですもの、……でも此方がまだしもですわ。」

「なんて、お前、お約束だもんだから、歸りに縁日へ廻つて、何か買はせようと思つてさ。さあ、行かうよ……ねえ、貴方一所に——千世ちゃん御挨拶をおしでないか。」

「——失禮。……お初に、」

「お初ぢやないよ。……貴方、此の妓は御存じだわね。」

「兩三度——千世ちゃんだつけ。」

「あら、濟みません、……誰方。」

と縫り寄るやうに、外套の襟を覗いて、

「まあ、清葉姉さんに岡惚れの、」

「謝まる。」

と俯向けに、中折帽ぐるみ顔を壓へて、

「何とも面目次第も無い！」

「……清葉命……と顔に書いてあるやうだわね、口惜いね、明い處でよく見て遣らうや。」

「何處へ行く氣なんです。」

「縁結びに……西河岸のお地藏様へ。」

肩でトンと寄添ひつゝ、

「分つたでせう、貴方、此の妓には遠慮は要らない。千世ちゃん、御覽、似合つたかい。」

「あら、姉さんは？」

「お孝さん。」

「(同じく妻)だわ。……雛の節句のあくる晩、春で、臙で、御縁日、同じ榮螺と蛤を放して、巡査の帳面に、名を並べて、女房と名告つて、一所に詣る西河岸の、お地藏様が縁結び。……これで出来なきや、日本は暗夜だわ。」

肩に掛つた留南奇の袖。

お孝を掠めて腕車が一臺。

「危え。」

矢の如し。

「おや、おいでなすつたよ……」

——露地の細路、駒下駄で——

細く透つて凄い聲する。

「可厭、姉さん。」

「それ、兄さんにおつかまり。」

飛つてお千世を葛木に縋らせて、ひとり棲を舉げて、悠然と前へ立つて、

「大丈夫、然うすりや、途中で、誰かに逢つても安心でせう。」

葛木は、扱兼ねたか、故と不答。

「千世ちゃん、お前寒くは無いかい。」

果せる哉、此の一行は、それから參詣を済まして歸りがけに、あの……仲通りで、一人軒傳ひに、包ましく來かゝる清葉に、ゆくりなく出逢つたのである。

横架賦詩

二十七

「今晚は……清葉姉さん。」

「清葉姉さん、今晚は。」

然うした事も、渾名を令夫人などと呼ぶる、筒條であらう、柔かな毛皮の襟巻を、雪の細面蔽ふまで、深々と巻いて居る。……上衣無しで、座敷着の上へ黒縮緬の紋着の羽織を着て、胸へ片袖、温容に褌を取る、襲ねた裳しつとりと重さうに、不斷さへ、分けて今夜は、何となく、柳を杖に支かせたい、すんなりと春の夜風に送られて、向うから来る姿。……手を曳かれたり、三人つれたり、箱屋と並んで通るののだの、薄彩色した陽炎が朧に顯れた風情の連中が、行違つたり、出會つたり、大勢の會釋するのが、間の隔つた時分から——西河岸の露店の裸火を、ほんのりと背後にして軒燈明の寢静まつた色の巷に引返す、——此の三人の目に明かに見えたのである。

「あれだ、玄徳……」

見ても分る。清葉の其の土地子に對して、徳と位と可懐味の有るのに對して、お孝は口の中に

呟いた。

「千世ちゃん、お放しでないよ、……葛木さん、横町へなんか躲しては卑怯なことよ。……」

「何が可恐くつて遁げるものかね、悪い事をした覺は無い。」

「唯、口説いて見たばつかりだつてね。」

「そしてだ、見事に刎ねられたから可いぢやないか。」

「嘘ばつかり、口説けもしないんぢやありませんか。」

「それも、評判かい。」

「先ね。」

「否、破れかぶれ、何を隠さう。言出すまいとは思つたけれども、凡夫の浅間しさに、つい、酔つた紛れに。」

「おや。」

「が、酒の勢を借りて、と云ふのが、打明けた處だらう——然も今夜——頭から恐入らされたよ。」と、もう一呼吸、帽子を深草、蓑より外套は見窄らしい。

此は蓋し事實なのである。

お孝は、一足前立つた、身を開いて、鈴を張つたやうな腫に一目凝視めて一寸領きながら、

「隠さず、白状をなすつたから、私がかまつて行くのは堪忍して上げます。……打棄つた清葉さんも豪いけれども。……」

で、立直つて凜とした聲、

「拾ひ手が立派です。……威張つていらつしやい。そんなに可恐がる事は無いわ。」

「否、恐れはせん、が、面目ないのだよ。」と窘まるばかり襟に俯向く。

齊しく俯向いて、莞爾々と笑つてばかり、黙つて、ついて歩行いた、お千世が、衣の氣勢にそれと知つて、眞先に、

「今晚は、」

「お、千世ちゃん。」

所謂口説いて勿ねられたと云ふ戀人に、然も同じ夜。突落された丸木橋の流に逆らつて出逢つたのである。葛木は次の瞬間を憂慮つて、靴の先から冷く成つた。

お孝が、横合から、

「御參詣ですか、清葉姉さん。」

「は……」

と、行違つて、溫容に見返りつ、

「姉さんて、可厭ですよ、ほ、ほ、人が悪いわ。」

と、すつと通つた。

知らぬ振か、實際それとも、面を蔽うたので認めなかつたか、心付かない様子で通過ぎたの、トお千世が袂を曳いたのに、葛木は宙を行くやうに、うか／＼と思はず別れた。

——お孝——

「姉さんて、可厭ですよ、ほ、ほ、人が悪いわ。」

二十八

「ちよつ、玄徳め。」

と、投げたやうに、袖を拂つて、拗身に空の雁の聲。臍を仰いで、一人立停つた孫權を見よ。英氣颯爽として寧ろ槩を横へて詩を赤壁に賦した、白面の曹操の概がある。

前へ行く二人の影に、其の通る聲で、此方から、

「通越し。」

と浴びせたのは、稲葉家の我家へ曲る火の番の辻であつた。

すぐに、カタ／＼と追従つて、

「千世ちゃん、清葉さんの長襦袢を見たかい。」

「え、可いわねえ。」

「色が白くて、髪が黒い處へ、細りしてるから、よく似合ふねえ。年紀よりは派手なだけけれど、娘らしく色氣が有つて、まことに可い。葛木さん、一寸、彼處へ惚れたんぢやないこと。」

「馬鹿な。」

「でも可いでせう。」

「長襦袢なんか、……些とも知らない。」

「まあ、長襦袢を見ないで藝者を口説く。……それぢや暗夜の礫だわ。だから不可いんぢやありませんか。今度、私が着て見せたいけれど、座敷で踊るんでないと一寸着憎い。……口惜いから、此の妓に拵へて着せませうよ。」

やがてお千世が着るやうに成つたのを、後にお孝が気が狂つてから、ふと下に着て舞扇を弄んだ、稻葉家の二階の欄干に青柳の絲とともに亂れた、纏る、玉の緒の可哀を曳く、燃え立つ緋と、冷い淺黄と、段染の麻の葉鹿の子は、此の時見立てたのである事を、一寸此處で云つて置きたい。序に記すべき事がある。それは、一石橋から此の火の番の辻に来る、途中で清葉に逢つた前。縁日は最う引汐の、黒い渚は掃いたやうに静まつた河岸の側で、さかり場からはづつと下つて、

西河岸橋の袂あたりに、其處へ……其の夜は、紅い涎掛の館屋が出て居た。

が、其では無い。

櫻草をお職にした草花の泥鉢、春の野を一缺かいて來たらしく無造作に荷を積んだのは歸り支度。踵を響の片膝立。すべりと兀げた坊主頭へ縞目の立つた手拭の向顛卷。圓顔で頬皺の深く口の大きい、笑ふと顔一杯に成りさうな、半白眉の房りした爺さま一人、かんでらの裸火の上へ煙管を俯向け、灰吹から狼煙の上る、火氣に翳して、スパクと吸つて、涎掛の館屋と何か云つて、アハ、と罪も無げに仰向いて笑つた、……其の顔を此方で見ると、葛木に寄纏つて、一石橋から來たお千世が、

「あ、お爺さんが。」と云ふと齊しく、振拂ふやうにして驅出したのであつた。

「可愛いわね。」

其を透かして、寫繪の樂屋の如き、一筋のかんてらに、顔と姿の寫るのを、故と立淀んで、お孝が視めて、

「ねえ、一寸。……生意氣盛りの、あの時分ぢや、朋輩の見得や、世間への外聞で、抱主の臺所口へ、見すばらしい親身のもの姿が見えると、つんと起つて、行きもしないお稽古だの、寢坊が朝湯へ行き兼ねないのに、大道唯中、（お爺さん）——え、お千世は那の人の孫なのよ、——

可愛ツちやないのねえ。」

熊の筒袖

二十九

「阿爺どの、阿爺どの。」

「はい、私かねえ。」

橋から橋へ、河岸の庫の片暗がりやを遠慮らしく片側へ寄つて、賣残りの草花の中に、蝶の夢には、野末の一軒家の明窓で、かんとらの火を置いた。荷は軽さうなが前屈みに、てくく歸る……お千世が爺の植木屋甚平、名と顔卷は娑婆氣がある。

背後をのさくと跟けて来て、阿爺どの。——呼聲は朱鞘の大刀、黒羽二重、五分月代に似て居るが、既にのさくである程なれば、然うした凄味な仲藏では無い。

按ずるに日本橋の上へは、困つた浪花節の大高源吾が臆面もなく顯れるのであるが、未だ幸に西河岸へ定九郎の出た唄を聞かぬ。……尤も此のあたり、場所は大日本座の檜舞臺であるけれども、河岸は花道では無いのであるから。

變な好みの、萌葱がかつた、釜底形の帽子をすツぼり、耳へ被さつて眉の隠る、まで低めづらした、脊のづんとある巖乗造。搦て加へて爪皮の掛つた日和下駄で、見上げるばかり大いのが、もくくとして肩も胸も腹もなく、づんぐり腰の下まで着込んだのは、熊の皮を剥いた、毛を其のまゝにした筒袖である。

此がもし對丈で、赤皮の靴を穿けば、樺太の海賊であるが、腰の下の見すぼらしさで、北海道の定九郎。

見よかし熊の袖を突出し、腕を頤のあたりへ上げ状に拱いた、手首へ面を引傾げて、横睨みにじろくと人を見る癖。

「歸るのかあ。」と少し訛る。

「はい。」

むかし権三は油壺。鯨藏から出たよな男に、爺さんは、きよとんとする。熊は件の横睨みで、

「おい、歸るのかあ。」

「家へかね。」

「うむ。」と頷く。

「歸りますよ、はい。」

「歸ると……ふん。何處か道寄りにはせんのですかい。」と、悪く横柄な癖に時々變徹に丁寧なり。

「道寄りとおつしやりますと?……」

「何よ、あれだ、お前、今彼處で。」

と人指一本、毛の中へ一寸出し、

「あれよ、藝者と少い男と三人連に逢うたでせうが。」

「はい、はい。」と大な口を開けて續けざまに頷き乍ら、目は却て半ば閉ぢて、分別したは老功也。

「知つてるだらうが、姉さんはお孝と云ふのだ。少い妓はお千世よ。」

「然やうでございます、はい。」と尙ほ胡散らしく薄目で見上げる。

「阿爺どのは、何うやら大分懇意らしい様子ですな。」

「え、否、些少の。何、お前さま。何か其の、私に用事で。」

「火を一つ貸してくれ。」

と云ふ、煙草より前に、藏造りの暗い方へ、背を附着け、づんぐりと小溝を股に挟んで大きく蹲み、帽子の中から、ぎろくくと四邊を見た。が、落こぼれたやうな影もまばらで、開いて居るのは、地藏尊の門と、隣家の煙草屋の店ぐらるに過ぎなかつた。

爺さんは通腰に天秤を捻つて、

「さあ、お點けなさりまし、だが、お早く願ひますので、はい。」

三十

「聞くだけ聞けば用は無いだ。」

例の訛つた下卑た語調。壓は利かないが威すと、兩切の和煙草を蠟卷の口に挟んで、チュツと吸つて、

「喃、阿爺どの、お孝が今だ、お前に別れて歸り際に、(待つてるからおいで、屹とだよ。)と言うたではないですかい。……違やせまいが、喃。」

爺さんは、面中の皺へ皺を刻んで、

「え、え、然やうな事もござりましたよ。」

「祕さずとも可い。喃、阿爺どの。お前は何だ、内の千世の奴の親身でせうが。孫娘に用が有つて逢ひに來たことが二三度あるです、で、俺は知つとるですわい。お前は何か、しかし俺の顔は知らんですか。」

と釜底帽、一名(のつべらぼう。)とも云はる、青べらの鰐を撈り上げて、引傾げて剥いで見せ

たは、酒氣も有るか、赤ら顔のづんぐりした、目の細い、しかし眉の迫つた、其の癖、小兒のやうな緊の無い口をした血氣壯の漢である。

「へい、否、お顔は在じて居りますほどでもござりませんが、其の上被の召ものでござります、お見事な、」

「慥う云つたのは籠の筒袖。

「稻葉家様の縁起棚の壁でござりますの、縁側などに掛つて居て拜見したことがござりますよ。はい。何でござりますか、それでは旦那様は、」

「うむ、内もの同然だ。」と頷を撫でる。

界限では、且つ知つて且つ疑ふ。土地に七不思議が有れば其れは其の第一に數へて可い。一石橋の河太郎、露地の駒下駄、お竹藏などとともに、此熊の皮が其である。濕深さうな膏ぎつたちよんぼり目を臘臍、毛並の色で赤熊とも人呼んで、所謂お孝の兄さんである。……本名五十嵐傳吾、北海道産物商會主とある名札を持つから、成程臘臍も賣るのであらうが、他に何を商つて、何處に住むか、目下の處未だ定かならずである。

それ、後家の後見、和尚の姪、藝者の兄、近頃女學生のお兄様、もつと新しく女優の監督にて候ものは、いづれも瓜の蔓の茄子である。此の意味に於て、知るものは、お孝に於ける籠の皮

を一方ならず怪むのであつた。

赤熊は指揮する體に頷で擲つて、

「喃、阿爺どの、だから俺には何も祕すことは要らんですわい。」

「え、え、別に祕すではござりませんが、（これからお茶屋へ行つて一口飲むから、待つてるから屹とおいで。）と、はい、其の屹とでござりますが、何の、貴下様、こんな爺に御一座が出来ますもので。姉さんが唯御串戲におつしやつたのでござりますよ。」

「串戲ではなかつたがい。俺はな、あの、了ひかけた見世物小屋の裏口に蹲んで聞いとつたんだ。」赤熊の此の容態では、成程立聽をする隠れ場所に、見世物小屋を選ばねば成らなかつたらう、と思ふほど、薄氣味の悪い、その見世物は、人間の顔の老犬であつた。

「それは、もし、萬ヶ一眞個に仰有つて遣はされたに爲ました處で、私は始めから其の氣では聞きませなんだよ。」

「何うでも可い。それは構はんが、俺が聞きたいのは、お前んに後から來い、と云うて、先へ行つた其の家の名ですわい。自分の内で無い事は知れて居る。……そりや何處ですか、阿爺どの。」

「あゝん、阿爺い。」

「さあ、何とか云ふお茶屋であつた。」と、獨言のやうに云つて、顛巻を反らして仰向く。

三十一

赤熊は、チエと俯向けの股へ唾を吐いて、

「今時分、何處の茶屋が起きて居らうで。待合に相違ないがい、阿爺い、祕さんと云へ、阿爺い。自分が来いと云はれた先の名を忘れると云ふがあるもんですかい。悪くすると爲に成らんですぞ。」と、教員らしい口も利く。

「さあ、何か存じませんが、待合さんかも、其は分りませんが、てんで私の方で伺ふ氣はござりませんで、頭字も覚えませぬよ、はい。」

「で、何か。」

と一寸腕めつけた、が更つて、

「あの、野郎は何かい、あれは、つひぞ見掛けぬ奴だが、阿爺は知つとるのですかい、奴をですがい。」

「え、私も今までお見掛け申しはしませんので、はい、いづれお客人でござりませう。」

「客には違はんで、それや違はんで。何方の客だ知つとるだらうか。」

「其は、もし、お尋ねまでもござりません、孫めがお附き申して居りましたよ。で、(旦那様、お初に。何うぞ何分。)と私御挨拶をしました處で、爺の口から旦那様が嬉しい、飲まして遣らう、と姉さんが申されたのでござりましたよ。」

跡方も無い嘘は吐けぬ。……爺さんは實に、前刻にお孝にも其の由を話したが……平時は、縁日廻りをするにも、お千世が左棲を取る此の河岸あたりは憚つて居たのである。が、抱主の家へは自分の了簡でも遠慮をするだけ、可愛い孫の顔は、長者星ほど宵から目先にちらつくので、同じ年齢の、同じ風俗の若い妓でも、同じ土地で見たさの餘り、ふと此の夜に限つて、西河岸の隅へ出たのであつた。

歸りがけの霞の空の、真中を蔽ふ雲を抜けて、かんでらの前へ、飛出したお千世の姿は、爺さんの目には、背後の藏から昨夜の雛が抜出したやうに見えて、あつと腰を抜いて、平坦と胡坐を搔いて、ものを言ふより莞爾々々として居たのである。

其の間に孝は、葛木と二人で參詣を済まして、知らぬ振して歸るも可い、が、却つて氣まづく思はせよう。

橋本日
(お爺さん虞美人草はないの、ぱつと散る。)櫻草の前へ立つた時、……お孝に挨拶をした爺さんが、(此は旦那様)と其の時葛木にお辭儀をしたので、

地藏様へお参りして、縁を結んで来た矢前——旦那様は嬉しいね——で、それから引上げる、待合の名を其處で教へて、旦那様に見立ててくれた禮心に、お爺さんには今夜一晩、……私が玉をつけて可愛いお千世を抱かして上げよう。……来て一所にお寝、申戯ぢやない、屹と待つて。……と云つた。

仔細は然うした事なのである。
赤熊が顯れた。

此の毛むくじやらを、稲葉家の縁起棚の傍で見たと云ふだけ、其の血相と、意氣込みで、様子を悟つて、爺さんは、やがて、押くり返し何と言はれても、行つた先を饒舌らなかつた事は言ふまでも無い。

「御自分、ついて行つて見なさりや可かつた。」

何か知らぬが、お千世が世話に成る稲葉家に退かぬ中の男、と思ふだけ、蟲を堪へて飽くまで下手に出た爺さんも、餘りの押問答、悪執拗さに、恚う言つて焦れたほどである。

知らぬ／＼で、事は済む、問はれる方が焦れたくらゐ、言敷を盡すだけ、問ふ方の苛立ち加減は尋常では無い！

「此の業突張、何だとツ。」

縁日がへり

三十二

「まあ、お前さん、怪我をしやしませんか。」

植木屋の布子の肩に、手を柔かに掛けた、弱腰も撓むと見える帶腰に、もの優しい羽織の紋の、藤の細い清葉であつた。

「栲問して遣る。」

赫と成つた赤熊が、握拳を被ると齊しく、かんで飛んで、眞暗に櫻草が轉けて覆ると、續いて、両手で頬を抱へて、爺さんは横倒れ。

苦とも言はせず、踏のめす氣か足を舉げた赤熊は、四邊に人は、邪魔は、と見る目に、御堂の灯に送らる、やうに、參詣を済まして出た……清葉が、臙の町に、明いばかりの立姿……それと見て、つか／＼と、小刻みながら影が映す、衣の色香を一目見ると、じた／＼と成つて胴震ひに立窘むや否や、狼狽加減も餘程な、一度驅出したのを、面喰つて逆戻りで、寄つて来る清葉の前を、眞角に切つて飛んで遁げた、赤熊の周章でた形は、見る／＼日本橋の袂へ小さく成つて、

夜中に走る颯に似て居た。

其方は見返もしないのである。

「お年寄を、こんなこと、何て亂暴なんだらう。」

「はい〜。」

爺さんは居ざり起きて、自分がたしなめられた如く、畏つて、漸と口を利く。……

「恐入りましてござります、はい。」

「音がしましたわ、申戲ではありません。嘸お痛かつたでせうねえ。怪我をしたんぢやありませんか。」

前刻から響いて居た、鐵棒の音が、ふツと留むと、さつくと沈めた鞋の響き。……夜廻りの威勢の可いのが、肩を並べてすつと寄つた。

「何うした、」

「何うしたんだえ。——やあ、姉さん。」

「頭たち、御苦勞です。……今、其處へ驅出して行つた大な男なんだよ。」

「臍臍。」

「赤熊。」と二人は囁いて、一寸目配。

「姉さん、こりや何かい、お前さんお係合なんですかい。」

「否、私は唯通りか、つたばかりなんです。でもまあ遁げてくれて可かつたけれど、抵つて來たら何うしようかと思つたよ。……可哀相に、綺麗な植木の花が。」

清葉は櫻草の泥鉢を、一鉢起して持ちながら、

「手傳つて、そして、よく見て上げて下さいな。遅うござんすから。私は失禮ですが。」

一人は組合の看板を、しやん、と一ツ膝に控へて、

「御心配にや及びません。見て遣りますとも。」

「では、お爺さん、お大事になさいまし。お氣をつけなさいましよ。」

「はい〜、あなた方の御志、孫も幸福。それが嬉しうござります。」

とツちて、着きも無いことを云ふのを、しんみりと聞いて、清葉は何故か、ほろりとしたが、

一石橋の方へ身を開いて向返。た處で、衣紋をつくつて、一寸、手招く。

鐵棒小脇に搔込みたるが一人、心得てつか〜と寄つた。

「え、……え、腕車に、成程。え、可うがす、可うがすとも。そりや仔細有りやしません。何、私たちに。申戲ぢやありません。姉さん、申……、然うですかい、濟まねえな。」

其のま、見送つて小戻りする。此の徒も清葉が戻路の方を違へて、なぞへに一石橋の方へ廻つ

たのは知らずに居たらう。

サの字千鳥

三十三

「何だか、唐突に謎見たやうな事だけれど、それが今夜の事の抑々と云ふのだから、恥辱も忘れて話すんだがね……」

上野から日本橋へ来る電車——確か大門行だったと思ふ——品川行にした處で、あの往復切符、勿論乗換札ぢやないのだよ。……其の往か復か、執方にしろ切符の表に、片假名の(サ)の字が一字、何か書いてあると思ひますか。」

葛木は卓子臺に乗せた寄鍋に着けようとした箸を、(まだ)とお孝に注意されて、其のま、控へながら話す。

お孝は時に、猪口を取つて、お千世の酌を受けたのである。

「サの字。」

「考へるに及ばないよ。そんな字は一つも無い。處が、松坂屋の前を越して、彼處は、黒門町を

曲らうとする處だ。……ふつと！ 心から胸へ、衣ものの襟へ突通るやうな妙な事を思つたのが、其(サ)の字、左の手に持つて居た切符を視て、其處にサの字が一字あつたら、其から行つて逢ふつもの。」

「清葉さん。」と薄目で見越して、猪口は紅を嚙んだかと思ふ、微笑のお孝の唇。

「……止さう、そんな事を云ふんなら。」と葛木は苦笑して、棒縞お召の寝々衣を羽織つた、胡坐ながら、両手を兩方へ端然と置く。

潰島田を正的に見せて、卓子臺の端にびたりと俯向き、

「謝罪つた、謝罪つた。斷つて手前の方から願ひましたものを。千世ちゃん、御免なさい、と云つて、お前さんもおややまり。」と言憎いから先繰りに訛つて置く。

「あら、姉さん、私は何にも。」とお千世は熱かつた銚子を持添へた、はつと薰る手巾を、其のまゝ銚子を撫でて云ふ。

「だつて、今、(行つて逢ふつもり)と、此方がお言ひなすつた時は、直ぐに清葉さんとお思ひだらう。」

「え、そりや思つてよ。」

「そら御覽、思つたつて饒舌つたつて、罪は同じくらゐだよ。其に、謝罪するには、お前さんの方

が役者が上だからさ、よう、一寸。」

「貴方、御免なさいまし、ほ、ほ。」

葛木は然し考へさせられた様子が見えて、

「成程、思つたつて饒舌つたつて、違ひは無いか。いや、然うまでは、なか／＼悟れない。……と云ふのは矢張り色氣なんです。……極りは悪いがね。」

其のサの字なんだ。切符の表に、有るべき理由の無い一字が、もし有つたら、何時も控へく、断念めて引退る、其の心が屹と届くぞ！……想が叶ふ。打明けて言へば清葉が言ふ事を背いてくれる。思切つて打着からう。サの字が無ければ、今夜も優柔しく、と言へば體裁が可い、指を衝へて引込まうと、屹と思つて熟と視ると、波打つ胸の切符に寄せる、夕日に赤い渚を切つて、千鳥が飛ぶやうに、サの字が見えた。」

「あ、」と其の千鳥を見るやうに、引入れられて、屏風はづれに前髪を上げた、臉の色。お孝の腫は恍惚と、湯氣の臍に美しい。

葛木も連れられて、夢を見るやうに面を合せて、

「明いね、この電燈は何燭だらう。」

「五燭よ、ほ、ほ、」とお千世が花やかな笑聲。鍋は暖く霞んだのである。

三十四

「あれ……此の妓が笑ふ。」

と葛木も笑ひながら、

「客が此だから其の筈の事だけれども、私の行く家が、元來甚だ立派で無いのだ。ね、座敷の電燈が五燭なんだよ。平時は、そんなでも無かつたが、過般中、連があつて、二人で出掛けた、爾時、其の千世ちゃんが出来たんだね。確か……」

お千世が頷く。

「覚えて居る、それを知つて、笑ふんだ。私のやうな、向う見ずに女に目の眩んだものに取つては、電燈の暗いなんぞ些とも氣には成らないがね、同伴の男は驚きましたぜ。何しろ火鉢に掴まつて、暫時氣を靜めて居ると、襖や障子が朦朧と顯れるけれども、坐つた當座は、人顔も見えないと云ふ始末だからね、餘り力を入れて物を見るので、頭が痛い」と云ふんだよ。其の妓も知つて居るけれども、同伴の男が。

客の無い閑な家だし、不景氣だし、いづれ經濟上の都合だらうから、餘分な御祝儀の出ない客が、(明を直せ)も殿様じみるから、同じメートルで光は三倍強と云ふ重寶な電球ね、あいつを寄

附しようとなつて、……来て居た清葉が、

「東西、黙つて。」

と笑顔をお千世に向けて、ト故と睨んで見せる。

「私、何にも言やしませんわ。」

「いや、何とでもお言ひ、恚う成れば意地で饒舌る。」と呻と煽る。

「お酌。」

と自分でお孝が、ツ、と銚子を向けて、

「其に限るの。貴郎は氣が弱いから可厭さ。」

「處で、……清葉が下階へ下りて、……近所だからね、自分の内へ電話を掛けて、婢にいひつけ

て、通りへ買ひに遣つた、タングステンが、やがて紙包みに成つて顯れて、芝居の月の書割のや

うに明るく成つた。

其處が、お鹿(待合の名。)の上段の間さ。」

「あら、申戲の間、可いわねえ。」

「いや、其の申戲ぢやない、御本陣式、最上等の座敷の意味だ。

人の好い、氣の好い、(お鹿)の女房が喜んで、貴方の座敷だ——貴方の座敷だと云つて通す。

まるで新座敷一ツ建増した勢だ。素ばらしいもんだね、恚う見えても。」

「有繫はね。」

「申戲ぢや無い、……いや、其の申戲では無い座敷の上段へ、今夜も通された——サの字の謎か

ら、ずつと電車で此地へ来てだよ。……

平時と違つて、妙に胸がどきつくのさ。頭の頂上へ圓鬘をちよんと乗せた罪の無いお鹿の女房

が、寂寞した中へお客だから、喜んで莞爾々々するのさへ、何うやら意見でも爲さうで成らない。

飯は濟んだ、と云ふのは、上野から電車で此地へ来る前に、朋達三人で、あの邊の西洋料理で

夕飯を食べた。其處で飲んでね、最う大分酔つて居たんです。可訝くふらくするくらゐ。其の

勢で、くわツと成る目の颯と赤い中へ、稻妻と見たサの字なんだ。

考へれば、千鳥の知らせでも無く、戀の神のおつげでも無い。酒のサの字だつたかも知れない

ものを。……其の酒さへ、弱身のある人が来て對向ひに成ると、臆面の無いほてつた顔を、一皮

剥かれるやうに醒めるんだからの。お察しものです。」

カチリと力無く猪口を置く。

梅ヶ枝の手水鉢

三十五

「座敷へ入ると間も無くさ、びり／＼硝子戸なんざ叩破りさうな勢、がらん、どん、どたくと
豪い騒ぎで、藝者交りに四五人の同勢が、鼻唄やら、高笑。喚くのが混多に成つてね。上り込む
と、此が狭い廊下を一つ置いた隣座敷へ陣取つて、危いわ、と女の聲。どたと襖に打つかる音。
どしん、と寝轉ぶ音。――楠の正成がーと梅ヶ枝の手水鉢で唄ひ出す。

座敷を取替へて上げよう、此方は一人だから。……第一寄進に着いた電燈に對してもお鹿の女
房が辭退するのを、遠慮は要らない、で直ぐに、あの、前刻のあれ、雛の榮螺と蛤の新聞包みを
振下げて出た。が、入交るのに、隣の客と顔が合ふから、私は裏梯子を下りて、鉢前へ一寸立つ
た。……

此處に、朝顔形の瀬戸の手水鉢が有るんです。此が又清葉が寄進に附いたのさ。お鹿の内には、
まだ開業當時と云ふので手水鉢も柄杓も無かつた。湯殿の留桶に水を汲んで、簀の子の上に出し
てある。恐らく待合の手水鉢に柄杓の無いのは、厠に戸の無いより始末が悪い。右は早速調達に

及んだけれど、桶は其のまゝに成つて居たのを、清葉が心付いて、何時か、女房が勘定を届けか
何か、瀧の家へ出向いた時、火事見舞に貰つたのが、まだ使はないで新しい、お役に立てば、と
持たして返した。……

知つての通り、清葉の家は、去年の火事に焼けたんだね。

何ですよ、奥庭に有つた手水鉢を見ましたがね、青銅のこんな形、とお鹿の女房は仕方をして、
そして龍の口を捻ると、ザアです。焼けてもびくともなさらない。すつかり青苔を帯びた所が好
いなんのツて、私に話した。

惚れた藝者の工面の可いのは、客たるもの、無心を言はれるより尙ほ怯む、……此處で又怯ま
された。

清葉の手水鉢、で聊か酔覺の氣味。二階は梅ヶ枝の手水鉢。いや、楠の正成だ。……大將も惜
い事に、懷中都合は悪かつたね。

二階へ返つて、小座敷へ坐直る、と下階で電話を掛けます。又冷評すだらうが、待人の名が聞
える。」

二人は黙つて微笑むのみ。

「ねえ、然うした電話が筒抜けに耳へ響くのは、事は違ふが、鳥屋の二階で、軍鶏の鳴聲を聞く

のと宵で居る。故に君子は庖厨を遠ざく……こりや分るまいが、大盡は茶屋の構の大からむこ
とを望むのだとね。

(誰だ、誰だ、誰を掛けてるんだ。)(何、清葉だ、清葉とは誰だ。)(一座の藝者が小さな聲で、(瀧
の家の姉さんよ。)(馬鹿、清葉が、こんな家へ来るもんか。)
と隣座敷で憚らない高話。)

「お酌ぎ……千世ちゃん、生意氣だね。お孝なら飛んで来る、と言やしないか。」

「誰も、そんな事を言ひはしませんよ。」とお千世が宥めるやうに優しく云つて内端に酌ぐ。

「口惜いねえ、……(清葉が来るもんか。)(呼んで下すつた、それが私で、お孝が、こんな家へと
云つて貰ひたかつた。……私は其處へ手水鉢なんぞぢやない、摺鉢と采配を両手に持つて、肌脱
ぎに成つて驅込んで驚かして遣つたものを。」

「でも、何だ、お前さんとは、今しがた逢つたばかりぢやないか。」

「ですから、今度つから、楠の正成で、梅ヶ枝をお呼びなさいよ、……其の手水鉢へ、私なら三
百圓入れて遣りたい、と此方でも思ふばかりだから、先方までも、お孝がこんな家へ来るもん
か、とは言はないわね。……貴方お盆を下さいな、……チョツ口惜いねえ、清葉さんは。……」

三十六

「少々加減が悪くつて、内で寝て居た、と云つて、黒の紋着の羽織で、清葉が座敷へ。」

前後七年ばかりの間、内端に打解けたやうな、そんな風采をして居たのは初めてかと思ふ。尤
も一寸ひく感言と、眩暈は持病で、都合に因れば假託でね——以前、私の朋達が一人、此は馴染
が有つて、別な或待合へ行つた頃——一寸々誘はれて出掛けた時分には、のべつに感言と眩暈
で、いくら待つても通つて見ても、一度も逢へた事は無かつたんだ。最う断念して居た處、其の
後宴會があつて、或お茶屋へ行くと、其の時、しばらく振で顔を見た。何だか、打絶えて居た親
類に思掛けず出逢つたやうな可憐い氣がしたつけ。それが縁で、……時々、と云つても月に二三
度、其のお茶屋で呼ぶとね、三度に二度は来てくれる。

其處の女中頭をして居たんだ、お鹿の女房と云ふのは。」

「知つて居ますわ。」

「氣心は知つたり、遠慮は無しで、其處へ行くやうに成つてから、餘り月日を置かないで、顔だ
けも見るのは、漸と一昨年の夏からだと思ふ。……

處で、能く、あんなで座敷が勤まるよ。……尤も私なんぞは座敷の中へは入るまいが、あの人

と來たら、煙草は喫まず、酒は飲まず、

「唯、貯るばかり。」

「まあ、堪忍し給へ。猪口は唇へ點けるくらゐに過ぎますまい、朝顔の花を嚙むやうに、」

「敗軍の鬱憤ばらしに、其のくらゐな事は言つても可いのね。」

「堪忍し給へ。酒を飲まない藝妓ぐらゐの口説き憎いものは無い。」

「ぢや、其方此方、當つて見たの。」

「否、人は何うだか私一人としてはなんだ。處で今夜だ——御飯は濟んだと云ふ、御粥を食べたんだとさ。」

「御養生でおいで遊ばすのね。……それから、」

「お鹿の女房も、暖るものが可からうと云ふんで、桶饅頭。」

「おや／＼おや。」とお孝は、がっかり、最一つうんざりしたらしい。

「……此處に八頭の甘煮と云ふのが有ります。」

と葛木は、小皿と猪口の間を、卓子臺の上で劃つて、

「一度讀めたが、以來お鹿の自慢でね、吃と通しものに乗つて出ます。……今日あたり土曜から日曜で私來さうだと思ふ日は、煮て置くんだとお世辭を言つた。が、噫々、十ウに九ツ此も見

納めに成らうも知れん、と云ふのは(サの字)の謎の事。……一度口へ出して、ピシリと遣られる、二度とは面は向けられまい、お鹿も今夜切と思ふと何となく胸が迫つて卓子臺の上が暗かつた……」

お孝はボンと楊枝をくべた、すうツと帯を揺つて焦れつたさうに、

「一寸、まあ、待つて頂戴よ。お粥腹のお姫様を饅頭で口説いて、八頭を見て泣いたつて、宛然お精靈様の濡場のやうだね。能く、それでも生命があつて歸つて來たよ。確乎して下さいよ、後生だから、お前さん、私が附いてるから。」

で、するり卓子臺の縁を這つて、葛木の膝に手を掛ける。

「あゝ、痛い。」

其のまゝ、背中をトンと凭たして、瞳を返すと、お千世を見て、

「何うした、お爺さんは遅いぢやないか。」

「あら、姉さん、來るもんですか。」

「私は來るつもりで待つて居たのに——其處の襖を開けて御覽よ、居るかも知れない。」

「まあ、と可愛く、目をばち／＼。」

「可いから一寸御覽。」

と言ふ、香の煙に巻かれたやうに、跪いて細目に開けると、翠帳紅圍に、枕が三つ。床の柱に櫻の初花。

口紅

三十七

「御維新些と前だつて、芝の大門通りの足袋屋に名代娘の美人が有つた。

其の時分、増上寺の坊さんは可恐しく金を使つたさうでね、怪しからぬのは居周圍の堅氣の女房で、内々圍はれて居たのさへ有ると言ふのさ。其の増上寺に、年少な美僧で道心堅固な俊才の一人あつた。夏の晩方、表町へ買物が有つて、麻の法衣で、ごそくと通掛ると、其の足袋屋の小僧の、店前へ水を打つて居た奴、太粗雑だから、ざつと刎ねて、坊さんが穿きたての新し白足袋を泥だらけにしたんだとね。……當時は電車で、毎々の事だが。

娘が夕化粧の結綿で驅出して、是非、と云つて腰を掛さして、其處は商賣物です。直ぐに足袋を穿替へさせると成つて、豫て大切なお山の若旦那だから、打たての水に棲を取ると、お極りの緋縮緬をちらりと扱んで、つくまつて坊さんの汚れた足袋を脱がさうとすると、紐なんです。……

……結んだやつが濡れたと来て、急には解けなかつた爲に口を添へた、皓齒で其の、足袋の紐に口紅の附いたのを見て、晩方の土の紺泥に、眞紅の蓮花が咲いたやうに迷出して、大墮落をしたと言ふ、いづれ墮落して還俗だらうさ。

此方は悔悟して、坊主にでも成らうと云ふんだ。……いづれ精進には縁があります。自棄だから序に言ふが、……私は、はじめて逢つた時、二十三の年、……高等學校を出ると、祝だと云つて連出して、村田屋で御飯を驕つたものがある。酒は飲めず、畏つて煙草ばかり吐かして居たので、愛想に一本、一寸吸つて、歸りがけにくれたのが、

「承知々々。」と又笑ふ。

「でね、口紅がついて居たんだ。」

「氣障だ。」とお孝は手酌である。

「坊主には縁があるつて事だよ。」

軽く清いで盃をさしながら、

「處を又還俗さしてあげるから、もとツこだわね。可哀相に……其のかはり小鱈の鮓を賣りやしないか。」

橋本日
と倦怠さうに居直つて、

「もし、其の吸口は何う遊ばしたえ？……後學の爲に承り置きたい……ものでござるな。……よ。眞個に、」

「路傍では踏つけよう、溝も氣に成る……一石橋から流したよ。」

「あゝ、祟りますねえ。そんな男を、私も因果だ。」

「恐入ります、が聞いて下さい。」

「聞いて遣はす、お酌をおし……御免なさいよ。」と彌々酔ふ。

「然うだ——あゝお銚子が冷めました、と憚う、清葉が、片手で持つて、褌の深い、すんなりとした膝を斜つかひに火鉢に寄せて、暖めるのに炭火に翳す、と節の長い紅寶玉を嵌めた其美しい白い手が一つ。親か、姉か、見えない空から、手だけで壓へて、毒な酒はお飲みでない、と親身に言つてくれるやうに、ト其片手だけ熱と見たんだ。……」

お孝が、偶と無意識の裡に、一種の暗示を與へられたやうに、掌を反らしながら片手の指を顯に隠した。其の指には、白金の小蛇の目に、小さな黒金剛石を象嵌したのが、影の白魚の如く絡つて居たのである。

後で知れた、——衣類の紋も、同じ白色の小蛇の巻いた渦卷であつた。

「時に、隣の間正成も、ふと音の消えた時、違棚の上で、チャチャ、と囁くやうに啼いたもの

がある。聲のしたのは、蛤です。動いたと見えて、ガサ／＼と新聞包が揺れたらうでは無いか。」

三十八

「(榮螺と蛤です。……)」

思掛けない音に、一寸驚いた顔をした清葉に然う云つて、土産ぢや無い、汐干では時節が違ふ。

……雖に供へたのを放生會、汐入の川へ流しに來たので、雖は姉から預かつたのを祭つて居る……

……先祖の位牌は、妹が一人あつて、其が齊眉く、と言つたんだね。

そして御姉妹は、と清葉が訊くから、(實は)と出ました。……實は、それに就いて、と言つた

もんです。何に就いてだが、自分にも分らない。けれどもね……何に就いたつて、あし掛七年の

間、唯一度も、氣障な、可厭らしい、そんな事を、言出せさうな機會と云つては一度も無かつた。

何時も、座敷の服裝で、きちんと藝者と云ふ鎧を着て居るのから見れば、羽織で櫛卷だけに、

客に取つては馴れ易い。覺悟は有つたし、サの字の謎。……

實は、と目を瞑つて切掛けたが、からツきし二の太刀が續きません。酌をして下さい、と一口

に飲んで又飲んだ飲んだ。もう一つ、もう一つ酌いで欲しい、又、と立續けに引掛けても、千萬

無量の思が、全然、早鐘の如くに成つて、ドキ／＼と胸へ撞上げるから、酒なぞ何處へ消えるやら。

口も濡れない處か舌が乾く。……又、清葉が何にも言はずに、那樣に煽切るのも道理だ、と斷念めたらしく見えて、黙つて酌ぐんだよ。

あゝ、酔つた。」

と袖を擦並べたお孝の肩に、頭を支たさうに頽然と成る。のをお孝が向うへ、片手で邪慳らしく、トンと突戻した、と思ふと、其の手を直ぐに、葛木の膝へ。敷いて重ねた腕枕に、ころりと横に成つて、爪先をすつと流す、と靡いた腰へ、男の寝々衣の裾を曳いて、半ばを掛けた。……「肝心な處、それから。」と自若として言ふ。

「弱つた……」

「私を口説く氣で、可うござんすか。眞個は、あの御守殿より、私の方が口説くには煩いんだから、其の積で、しつかりして。」

「破れかぶれは初手からだ。構ふもんか！……更つて（清葉さん）。……」

「黙つて顔を見ましたかい。」

「惚れたと云ふのが不躰であるなら、可憐いんです、床いんだ、慕しいんです。……私に一人の姉がある、姉は人の妾だつた。……戀こがれた若い男が有つたのに、生命にかへて或相場師の妾に成つた……其は弟の爲だつたんです。」

私の父親は醫師だつたんだよ。……と云ふお醫師も、築地、本郷、駿河臺は本場だけれども、藥研堀の朝湯に行つて、二合半引掛けてから脈を取つたんださうだから、醫師の方では場違ひだね。廣袖を着たまゝ、亡くなると、看病やつれの結び髪を解きほぐす間も無しに、母親も後を追ふ。姉は二十、私は十三、妹は十一で、六十を越して祖母さんが、あとに残つた……私と妹は奉公に出たんです。

姉は祖母をかゝへて、裏長屋に、間借りをして、其處で、何か内職をして露命をつないで居る。私が小僧に成つたのは、赤坂臺町の葉茶屋だつた。」

膝に島田を乗せながら、葛木の色は白澄んだ。

チャラン／＼、と河岸通、五郎兵衛町を出番の金棒。

一 重 櫻

三十九

「忘れもしない、すつと以前——今夜で言へば昨夜だね——雛の節句に大雪の降つた事がある。其の日、兩國向うの得客先へ配達する品があつて、其は一番後廻、途中方々へ届けながら箱車を

曳いて、草鞋穿で、小僧で廻つた。日が暮れたんです。兩國の橋を引返した時の寒さつたら、骨まで透つて、今思出しても震へ了ふ。

何の事は無い、山から小僧が泣いて来たんだ。

人通りは全然無し、大川端の吹雪の中を通魔のやうに驅けて通る郵便配達が、唯た一人。……其が立停まつて、チョツ可哀相にと云つた。……聲を出して泣きながら、聲も潤れて、漸と薬研堀の裏長屋の姉の内の臺所口へ着いた、と思ふと感覚が無い。

浸々と降る雪の中に、唯どしんと云ふ音がしたつて、姉が後で言ひくした。

處が何うです……妹は妹で、其の前夜から奉公先を病氣で下つて、内で寝て居る。

此が又悲惨でね。……聞いて見ると、猫の小間使に行つて居たんだ。主人夫婦が可恐い猫好きで、其の爲に奉公人一人給金を出して抱へるほどだから、其の手數の掛る事と云つたら無い、お剩に御祕藏が女猫と来て、産の時などは徹夜、附つ切。生れた小猫に、すぐに又色氣が着くと、何と何うです、不潔物の始末なんざ人間なみに爲せられる。……處へ、妹が女の子の癖に、豫て猫嫌ひと来て居たんだものね。死ぬほどの思ひで、辛抱はしたんだが、遣切れなく成つて煩ひついた。(少し變だ、顔を洗ふのに澄まして片手で撫でる、氣を鎮めるやうに。)と言つて、主人から注意があつたんだとね。

祖母は祖母で、目を煩つて殆ど見えない。二人の孫を手探りにして赤い涙を流すんぢやないか。私は氣が付くと、其の夜、——後で妹の話聞いて慄然して飛んで出たが、猫行火に嚙着いて居て、豆煎を頬張つたが、餘り腹が空いて口が乾いて咽喉へ通らないから、番茶をかけて搔込んでたつて。

内職の片手間に、近所の小女に、姉が阪東を少々、祖母さんが宵は待ぐらるを教へて居たから、豆煎は到来ものです。

(白酒をおあがり、晉ちゃん、私が縁起直しに鉢の木を御馳走しよう。)と、鉞落しの長火鉢の前へ、俎と庖丁を持出して、雛に飾つた榮螺と蛤をおろしたんだ。

重代の雛は、掛物より良い値がついて、疾に賣つた。有合はせたのは土彩色の一もん雛です。

中にね、——潰島田に水色の手柄を掛けた——年數が経つて、簪も抜けたり、其の鬢の毛も凄いやうな、白い顔に解れたが——一重櫻の枝を持つて、袖で抱くやうにした京人形、私たち妹も、物心覺えてから、姉に肖て居る、姉さんだくと云ひくしたのが、寂しく其の蜜柑箱に立つて居た。

其をね、姿見を見る形に、姉が顔を合せると、其處へ雪明りが映して蒼く成るやうに思つたよ。姉が熟と視めて居たが、何と思つたか、榮螺と蛤を舊へ直すすと、入かはりに壇へ飾つた其の人形

を取つて、俎の上へ乗せたつけ……」

「千世ちゃん。」

と葛木の膝枕のまゝ、お孝が呼んだ。

「はあ。」と襖越しに返事した。お千世は、前刻其處を見せられた序に、……（眠からう先へお寝な。）と言はれたのである。そして寂寞して今しがた、する／＼と帯を解いた氣勢がした。

四十

「寒く成つた、搔卷をおくれ。」

とお孝は曲げた腕を柔く疊に落して、手をかへた小袖の縞を、指に掛けつゝ、男の膝。

「姉さん、私、帯を解いてよ。」

「生意氣お言ひでないよ、當も無しに。可いから持つといで。」

「うまい装をして、」

と膚の摺れる、幽かな衣の捌きが聞えて、

「御免なさいまし。」と抱いて出た搔卷の、それも緋と淺黄の派手な段鹿子であつたのを、萌黄と金茶の翁格子の伊達巻で、ぐいと縊つた、白い乳房を夢のやうに覗かせながら、ト跪いてお孝の

胸へ。

襟足白く、起上るやうにして、するりと咽喉まで引掛けながら、

「貴方、同じ柄で頼母しいでせう、清葉さんの長襦袢と。」

「學士は黙つて額を壓へる。」

「姉さん、枕よ……」

「不作法だわ、二人で居る處へ唯た一ツ。」

「知らない、姉さんは。」

「持つてお歸り。」

「はい。」

と立つて、脛をする／＼と次の室へ。襖を閉めようとして一寸立姿で覗く。羽二重の紅なるに、緋で渦卷を絞つたお千世の其の長襦袢の絞が濃いので、乳の下、鳩尾、窪みに陰の映すあたり、鮮紅に血汐が染むやうに見えた——俎に出刃を控へて、濱島田の人形を取つて据ゑた其話しの折の所爲であらう。

凄さも凄いが、艶である。其の緋の絞の胸に抱く蔽の白紙、小枕の濃い淺黄。隅田川のさゞ波に、櫻の花の散敷く俤。

非ず、此時、兩國の雪。

葛木は話したのである。

「姉の優しい眉が凜と成つて、顔の色が蠟のやうに、人形と並んで蒼みを帯びた。餘りの事に、気が違つたんぢやないかと思つた。

顔の色が分つたら祖母さんは姉を外へ出さなかつたらうと思ふね。——兄弟が揃つた處、お祖母さんも、此の方がお氣に入るに違ひない、父上、母上の供養の爲に、活ものだから大川へ放して来ようよ……

で、出たつ切、十二時過ぎまで歸らなかつた。

妹が涙ぐんで、(兄さん、姉さんは？ 見て来て下さい)と言ふ。私も水へ飛込み兼ねない勢で、臺所へ出ようとする、姉は威勢よく其處へ歸つた。……

白鳥を提げてね、景氣よく飲むんだつて……當人既に微酔です。お待遠様と持込んだのが、天麩羅蕎麥に、桶饅頭。

女二人が天麩羅で、祖母さんと私が饅頭なんだよ。考へて見ると、其の時分から意氣地の無い江戸兒さ。

其の晩、豫て口を利いた濱町の骨董屋の内へ駆込んで、(あい)と返事をしたんだつて。

浅草、花川戸の、軒に桃の咲く二階家に引越して、都鳥の籠甲の花笄、當分は島田のまゝで、祖母さんと妹が其處へ引取られて、私は奉公を止して、中學校の寄宿舎へ入る。續いて白筋の制帽と成つて、姉の思一つなんだ。かみわざで助けられるやうに、金釦の制服と漕ぎつけた。

伐木丁々

四十一

「……迄は、先あ可かつたんです。……處が、其の後祖母の亡くなつた時と、妹が婚禮をした時ぐらゐるなもので、可懐い姉は、毎晩夢に見るばかり。……私には逢つてくれない。二階の青簾、枝折戸の朝顔、夕顔、火の見の雁がね、忍返しの雪の夜。それこそ、鳴く蟲か小鳥のやうに、どれだけ今戸のあたり姉の妾宅の居周圍を、あこがれて徘徊つたらう、……人目を忍び、世間を兼ねる情婦でも有るやうに。——暗號で出て来る妹と手を取つて、肩を抱合つて、幾度泣いたか知れませんか。……姉は恥かしいから逢はぬと歎く。女の身體の、切刻まれる處が見たいか、と叱るんだね。

其の弟の身に成ると、姉は隅田川の霞の中に、花に包まれた欄干に立つて、私を守つて居るや

うでもあるし、紅蓮大紅蓮と云ふ雪の地獄に、俎に縛られて、胸に庖丁を擬てられながら、救を求めて悶えるとも見える。……

死ものぐるひに勉強をしたよ。

大學へ入ると言ふ、其の祝ひだ、と云つて、私を村田屋へ連出したのは、姉の旦那だ。

其の時清葉を見ました。

心の迷ひか、濟まん事だが、脊恰好、立居の容子が姉に肖然。

此の方は手形さへあれば、曲りなりにも關所が通られると思ふと、五度に一度、それさへ半年の間なんだ、……小遣を貯めるんだからね。……また藝者の身に成つて見りや、迷惑な事は夥多しい。」

お孝は黙つて頭を掉つた。

「姉の方は、天か地か、まるで幽明處を隔つ、遠い昔のものがたりの中に住むか、目近に姿ばかりの錦繪を見るやうだらう。同じ、娑婆に、おなじ時刻に、同じ檜物町の土地に、たゞ町を離れて、本郷の學校の門と、格子戸を隔てただけで住んで居る筈の清葉さへ、夢に見ても夢でさへ、遠出だつたり、用達しだつたり、病氣だつたりして逢へないんだものね。半年の間熟と目を塞いで居て、お茶屋の二階で目を開いて、ドキ／＼する胸を壓へるのが其の仕儀なんだ。」

一度も夢で泣いたのは……」

天井を高く仰いで云つた、學士の瞳は水の如し。

「何處か……私の寄宿舎の二階と向合ふ、同じ高さに川が一筋……川が一筋。……で、夢だらう。水は其の下を江戸川の（どん／＼）ぐらるな流れで通る。向う岸に二階がある。表だけ見えて、欄干が左右へ……真中に榎の大樹があつて仕切る、其の二階がね、一段低く成つて流に臨んで、も一つ高い座敷が裏に有りさうなんだ、夢だからね、お聞き。……いや聞いておくれ。」

其の左右の欄干の、向つて右へ、嫺娜と掛つて、美しい片袖が見える。ト頬杖か何か、物思はしい風情で、熟と此方を視めるらしい、手首が雪のやうに、ちらりと見えるのに、顔は榎に隠れたんだ。榎は何處か、深山の崖か、遠い驛路の出入境に有る、繁つた大なる年経る樹らしい。

其處へね、むく／＼と動いて葉を分けて、ざわ／＼と枝を踏んで、樵夫が出て來た。花咲翁の畫にあるやうな、あゝ、」

と横を向いて卓子臺を幽に拊つて、

「前刻、西河岸で逢つた植木屋……ね、一寸背て居たよ。取留めは無いのだけれども。

其翁さんが、コツ／＼と斧を入れる。が、斧の音は、あの、伐木丁々として、百里も遠く幽だのに、一枝、二枝、枝は、ざわ／＼と緑の水を浴びて落ちる。」

「三枝、五枝、裏搔いて其の繁茂が透くに連れて、段々、欄干の女の胸が出て、帯が出て、寝着姿が見えて、頬が見えて、鼻筋の通る、瞳が澄んで、眉が、はつきりと成る。縋毛がはらりと

か、つて島田鬻が見えた。
川の水が少し渺として、月が出たのか、日が白いのか、夜だか晝だか分らない。……間が凡そ何のくらくらか知れないまで遠く成る、と其の一段高い女の背後に、すつくと立つた、大な影法師が出た。一段高いのに、突立つたから胸から上は隠れたが、人とも獣とも、大な熊が蔽はれか、るやうに見えたんだがね。」

「一寸待つて！」

お孝の怯えたらしい慌しさ。が沈んで力ある聲に、學士は夢から現の世に引き戻されて、

「え、と驚く。」

「此處を抱いて居て下さい。」

其の聲は、最う静であつた。搔卷越に、お孝は學士の手を我が胸に持添へて、

「さあ、話しておくんなさいな、——身に染みるわねえ。」

「たわいは無いんだよ。……すがくしいが、心細い、可哀な、しかし可懐しい、胸を絞るやうな驛路の鐸の音が、りんくと響いたので、胸がげつそりと窪んで目が覺めるとね、身體が溶けるやうな涙が出たんだ。」

其の二階越の女が、何うしても姉なんだ。いや清葉だつた。然もつい近頃の事なんだよ。」

「……………」

「話が前後に成つたんだがね、……夢を見たのは、姉が最う行方知れずに成つてからです。」

「行方知れず？……と手を支く音。」

「私が兎に角、今の學校を卒業すると、妹には代々の位牌を、私には其の一組の雛と、人形を記念に残して觀音様の巡禮に、身は亡きものと思つておくれ、——妹に——達者でおくらし、——私に、晉さん御機嫌よう——

妹には夫がある。

此の行方を探すには、私が巡禮に出なければ成らないんだ。

が、それは今出来兼ねる。

雖然、夢にも快く逢へる事か、似た人にさへ思ひのまゝには口も利けない。七年越し（私は姉が欲しい、……お前さんが欲しい、清葉さん。）と清葉に云つた。

今夜思切つて言つたんだ。

唯他人でありたく無い！ が、いま此の二人は、きやうだいに成り得る世界を持たん。夫婦に成りたい。一所に成りたい、唯他人ではありたく無い。しかし様子を見ても大抵分る、此は肯入れてはくれないだらう、断然断らるゝに違ない！

私は、お前さんから巡禮に成る、少くとも行方知れずに成る、杯をうけて下さい。」

「御守殿は何と云つて？」と言は烈しく、搔卷はすらりとして居る。

「清葉は、すつと横を向いて、襦袢の袖口をキリキリと嚙んだ。」

「一件だね。」

「私は胸が迫つたよ。……清葉が、聲を震わせて言つた。……（お察し申します。）」

「へえ。」

「貴方の姉さんが私でしたら、貴方に何とおつしやるでせう。貴方は姉さんにお聞き下さいまし。私には母があります、養母です。」と俯向いたが、起直つて、（母に聞かなければ成りません。ト……また私には子があるんです。其の子の父があるんです。一人極つた人があれば、果敢ないながら藝者でも操を立てねば成りません。藝者の操、貴方お笑ひなさいまし。私は泣いて、其のお別れの杯を頂きませう。……）」

「あ、言ひさうなこつた。御守殿め、チョツ。」と膝を丁と支くと、颯と搔卷の紅裏を蹴す、お孝は獅子頭を刎ねたやうに、美しく威勢よく、きちんと起きて、

「でも、有繋に土地の姉さんだねえ。」

空 蟬

四十三

「もしく、貴女様、もし……」

此處に葛木に物語られつゝある清葉は、町を隔て、屋根を隔てて、彼處に唯一人、水に臨んで欄干に凭れて待つ。……男の夢の流では無い、一石橋の上なのである。が、姿も水も其の夢よりは幻影である。

唯、小腰を屈めて差覗き、頭を揺つて呼掛けたのは、顛卷も尙だ除らないまゝの植木屋の甚平爺さん。

「今頃、何をしておいでなさります、お一人でこんな處に……は、は、」

と底力の無い愛想笑で、

「いや、もう、人様の事をお案じ申すと云ふ効性もござりません。……お助けを被りました御禮を先へ申さねばなりませんのでござりました。はい、先刻は何とも早や、お庇で助かりました。頓と生命拾ひでござります。それに又、お情深い貴女様、種々と若衆たちまで、お優しいお心附を下さいまして、お禮の申上げやうもござりません。」

「あゝ、植木屋さん。」

と云ふ……人を見た聲も様子も、通りがかりに、其の何となく悄れたのを見て、下に水ある橋の夜更、と爺が案じたほどのものでは無い。

「今、お歸りなんですか。」

「はい、えゝ、貴女からお心添へ、と申されて、途中で又待伏せでもされるやうな事があつては成らねえ。泊れ、世話をせう、荷なりと預つて遣らうと、恚う云うて下さいましたが、何、前後の様子で、私、尺を取りました寸法では、一時赫として手を上げましたばかり。然して意趣遺恨の有る覺えとてもござりませず、……何また、此の上に重ねて亂暴をしますやうなれば、一旦は些と遠慮がござりまして故と控へましたやうなもの、いざと成れば、何の貴女、唯打たれて居りますものか。向脛を搔拂つて、ぎやつと傾倒らしくれますわ。」と影辨慶が橋の上。固より好む天秤棒、眞中取つて擔ぎし有様、他の見る目も覺束無い。

つけ景氣の廣言さへ、清葉は眞面目に憂慮ふらしく、

「でも、お年寄が、危いぢやありませんかね、喧嘩は唯當座のものですよ。一晩明かしてお歸りなさると可かつたのにねえ。」

「はい、それに實は何でござります、……大分年數も経ちました事ゆゑ、一時半時では、誰方もお心付の憂慮はござりませんが、……貴女には、何をお祕し申しませう、私は其の、はい、以前は矢張り此の土地に住ひましたもので。」

「まあ、」

「えゝ……悴が相場ごとに掛りまして分散、と申すほど初手から然したる身上でもござりませぬが、幽には、御覺えがあらうも知れませぬ、……元數寄屋町の中程の、もし、へゝゝ、煎餅屋の、はい、其の時分からの爺でござりますよ。」

「あら、お店の前の袖垣に、朝顔の咲いた、撫子の綺麗だった、千草煎餅の、知つて居ますとも——まあ、お見それ申して濟まないことねえ。」

はずんだ聲も夜とともに沈んで聞えて靜である。

「滅相な、何の貴女。お忘れ下さるのが功德でござりますよ、はい、でも私は粗とお見覺え申して居ります、たしか……瀧の家さんのお妹御……」

「え、小女い方よ、お爺さん、こんなに成つて……お可憐いのね。」

四十四

「御主婦さんは、」

「養母ですか。息災ですよ。でも、めつきり弱りました。」

「私、陰ながら承つて存じて居ります。姉さんが、お亡くなりになりましたさうで。あの方はお丈夫で……貴女はお小さい時から悪戯もなさらず、何時もお弱くつておいでなさいましたが、然し、まあ、御機嫌よう、御全盛で。」

「否、全盛處ではござんせん。姉が達者で居てくれますと、養母も力に成るんですけど、私がこんなですからね。——何ですよ、何時も身體が弱くつて困りますの。」

「お見受け申しました處でも、些と蒲柳なさり過ぎますて。」

「何やら、もの思はしげな清葉の容子を、最う一度凝めて視て、」

「尤も柳に雪折なし、却つて御心配の無いものでござります。でござりますが。」

「爺さんは天秤を潜るが如く、腰を極めて、一息寄る。」

「其のお弱い貴女が、又……何で、今時分、こんな處に夜風は毒の、橋は冷えます。私なんぞ出

過ぎましたやうでござりますが、お案じ申すのでござりますよ。」

「難有う、……身投げぢやないの、お爺さん。」

「滅法界な、はッはッ。」

「でも、眞個は投げて可いんです、今夜あたり。」と微笑んだ、が、笑顔の氣高いのが凄いやうに見える。

「滅相至極も無い。」

「親身に心配して下さるのを私、申戯を云つて済みません。眞個身でも投げさうに、それは見えませんでしたせうとも。一人で、こんな處に茫乎して。」

「實はね、お爺さん、宵からお目に掛つて居た客が、歸りがけに此の橋から放生會をなすつた品があるんです。——昨日はお雛様のお節句だわね——其の蛤と榮螺ですつて。」

「はい、成程。」

「殿方ばかりでなさるんでは、故とらしくも聞えますが、其の方は御姉さんの御遺言……まあね、……遺言と云つた譯なんですとさ、私も姉が亡く成つたんです。」

「何ですか、可憐くつて、身に染みて成らないのに、少々仔細が有りましてね、最う其の方とも此切、お目に掛られないかも知れなく成つたの。七年以來、夢にまで、眞個に夢を見て頂くまで、」

眞眞に……思つて……下すつた……のに。」

袖を落して惰るゝ手に、鐵の欄干は痛々しい。

「私……最う御別離をお見送り申し旁々、切めて、此の橋まで一所に来て、優しい事を二人でして、活きものの喜ぶのを見たかつたんですけれども、二人ばかりの朧夜は、軒續きを歩行くのさへ謹まねば成らないやうに、もう久しい間……私ねえ、寝けられて居るもんですから、情ないのよ。お爺さん。お恥かしいぢやありませんか。其のね、(二人で来る。)と云ふのさへ、思出さねば氣が付かない迄、好きな事、嬉しい事、床しい事も忘れて居て、お暇乞をしたあとで、何だか頻に物たりなくつて、三絃を前に、懐手で熟と俯向いて居る中に、漸つと考へ出したほどなんですの。

私許でも、眞似事の節句をします。其の榮螺だの蛤だのは、何うしたらうと、何年越か、ふつと、其も思出すと、屹と何かと突包んで一所に食べたに違ひない。菱餅も焼くのを知つて、其が草色でも、白でも、紅色でも、色の好みは忘れて居る……あ、何と云ふ空蟬の女に成つたらう、と胸が一杯に成つたんですよ。」

四十五

「お地藏様の縁目だし、序と云つては失禮だけれど、其方と御一所に、お參詣をしながら、貝を流しに來られたら、何んなに嬉しかつたらうと思ひますとね、……それなり内へ歸る氣に成れなかつたもんですから、後を慕つたやうに見に來ました。

お爺さん、其の方は、随分、私に思切つた、殿方の口からでは、嘸ぞ仰有りにくからうと思ふ事さへ、打明けて下すつたのに、私は女で、女の口から言つて可い、言はねばならない……今、唯、お前さんに話をした、一所に此處までお見送りがしたい、と其れだけさへ、口へは出せない身なんですもの。

大抵お察しなさいまし。……小兒のやうな罪の無い、そして其より、酔いも甘いもよう知つて、浮世を悟つたお老人は佛様、何にも隠す事は無い。……私には、小兒の親の旦那があります。

何うせ女房さんや兒があつて、浮氣をなさるくらゐな人、妾てかけは他にもある。珍らしくも無い私を、若い妓に見かへないで瀧の家一軒世帯の世話をしてくれますのは、棄てる言分が無いからです。落度があれば其切、まことに頃日の様子では、内々ぢや持扱つて、私の落度を捜して居るかも知れませんか。大一座でもあるなら知らず、差向ひでは、申戲も思切つては言へませんわ。

那様に、だらしなく意氣地なく、色戀も、情も首尾も忘れたやうな空洞に成つたも、燃立つ心

を冷しく、家を大事と思ふばかり。其の家だつて私のぢやない。……

ねえ、お爺さん。」

と面を背けて、

「養母へ義理たつた一つばかりなのよ！……」

亡く成つた姉に、生命がけの情人が有つて、火水の中でも添はねば成らない、けれど、借金のために身拔けが出来ず——以前盗人が居直つて、白刃を胸へ突きつけた時、小夜着を被せて私を庇つて、びくともしなかつた姉さんが、義理に堰かれて逢ふことさへ出来ない辛さに、私を抱いてほろ／＼泣く。

出生は私、東京でも、静岡で七つまで育つたから、田舎ものと言はれやうけれど……其の姉さんを持つたお庇に、意地も、張りも、達引も、私は習つて知つて居る。

其の時に覺悟をして、可厭で可厭で成らなかつた、旦那の自由に成つたんです。又然うして、後々までも引受ければ、養母が承知をして、姉を手放してくれたんですもの。……

ちやんと養母に約束した、其の時の義理がありますから、自分ぢや、生命も隨意には成りやしない。

お爺さん、私や藝者のかざかみにも置かれぬ……意氣な人には御守殿だ、……奥さんだ、お

部屋だつて言はれます。」

はなじろみながら眉の昂つた、清葉の聲は凜とした。……途中でお孝の三人づれに行逢つたを爺は知るまい。が、言ふ清葉より聞く方が、ものをも言はず、鼻をすゝる。

「心に思ふ萬分一、其の一言は云はないでも、姉の身ぬけに慍う／＼と、今云つた義理だけは、私は其の人に言ひたかつた、言ひたかつたんです。」

と思はず絶つて泣くやうに、聲が迫つて、

「ですけれど、他人は知らず、私たち、然うした人に、此の事を打明けては、死んだ姉に恩を被せる、と乗つてる蓮の臺が裂ける……姉は私に泣いてませう、泣いてくれるのは嬉しいけれど、氣の毒がられては、私は濟まない。

坊主に成る、とまで眞實に愚に返つて、小兒のやうに言つた人に、……私は堪へて黙つて居ました。……」

彩ある雲

爺さんは、先刻打撲された時怪飛んだ、泥も拂はない手拭で、目を拭くと、はッと染みるので、驚いて慌しいまで引擦つて、

「他所目には大所の御新造さんのやうに見えます、其の貴女が、……矢張り苦界、執れ苦の婆でござります。それにつけても孫が可愛うござりますので、はい。」

沈めて、靜に、

「お孫さん？……」

「え、女の子でござりまして。」

「まあ、私は些とも知りません。」

「御尤でござりますとも。……未だ胎内に居ります内に、唯今の場末へ引込みましてな。」

「では、私の静岡と同じだわね。それは、まあ、お樂み。」

「否、處が何うして、處が何うして。」

と頭を掉つて、下して有る天秤に擱りながら、

「大苦みなわけでござりまして、貴女方と同一と申すと口幅つたい、其の數でもござりませんが、……稲葉家さんに、お世話に成つて居りますので、はい。」

「まあ、お孝さんの許に、……些とも私知らなかつた。」

「はい、彼方の姉さんも、あの御氣象で、よく可愛がつて下さいます、が、願へますものならば、貴女のお手許に、と其の時も思つた事でござります。否、不足を言ふではござりません。藝者と一概に口では云ひ條、貴女は、それこそ歴乎とした奥方様も同じ事。一人の旦那様にちやんと操をお守りなされば、こりや天下第一本筋の正しい道をお通りなされる、女の手本でござります。彼娘にもな、あやからせたう存じますので。」

「飛んでもない、お孝さんこそ可い姉さん。あ、でなくては不可ません。私は何も、曲んだり拗ねたりして、恚う云ふのではないんです。お爺さん、色でも戀でも無い人に、立てる操は操でないのよ。……一人に買はれる玩弄品です。大人の手に遊ばれる姉さま人形も同じ事。」

ふと言絶え、嘆息して、

「此處で榮螺を放した方は、上の壇に榮螺が乗つて、下に横にして供へられた左棧の人形を、私とは御存じないの。」

と、半ば亂れた獨言、聞かせぬつもりで聲が曇る。

「何も浮世でござりますよ。」

と分らぬながら身につまされて、爺さんはがつくりと蹲んで俯向き、もう一度目を引擦つて、
「何の眞似は出来ませいで、切めて藝ことで、勤まるやうに成れば可いと存じますよ。貴女な

ぞは何が何でも、其處が強味でいらつしやいます。憂さも辛さも、絲に掛けて唄つてお了ひなさ
りまし。藝ことも貴女ぐらゐにお成りなされると、人の樂みより御自分のお氣晴しに成ります。
……中にも笛は御名譽で、お十二三の頃でございましたらうか、お二階でなさいますが、私ど
も一町隣、横町裏道寂と成つて、高い山から谷底に響くやうでございましたよ。」

「パイ〜、笛の麥藁ですかえ、……あんな事を。」と、むら雲一重、薄衣の晴れたやうに、嬉し
うに打微笑む、月の眉の氣高きよ。
「あの、時分の事を思ひますと、夢のやうでござります。此の頃でも、御近所だと時々聞かれま
すのでござりませうがな。」

「可い鹽梅。」

とや、元氣に、

「幸と聞えやしませんよ。……でも笛だけは、もう何時も、帯につけて居ますけれども、箱部屋
の隅へ密として置くばかり。七年にも八年にも望まれた事はありません。世間ぢや誰も知らない
のに、お爺さん、ひよんな事を言出して、何だか胸があつく成つた。笛が動いて胸先へ！……嬰
兒のやうに乳に響く！ 何時でも口を結へられて、袋に入つて居るんだから。」

と命を抱く羽織の下に、屹つと手を掛けた女の心は、錦の綾に、緋總の紐、身に引きしめた臍
の顔に、彩ある雲が、颯と通る。
眉を照らして、打仰ぎ、

「……世に出て月が見たいんでせう。……吹きはしませんよ。」

とすらりと抜いて、衝と欄干へ姿を斜めに、指白々と口に取る。

あゝ、七年の昔を今に、君が口紅流れしあたり。風も、貝寄せに、おくれ毛をはらくと水が
戦ぐと、沈んだ榮螺の影も浮いて、青く澄むまで月が晴れた。と、西河岸橋、日本橋、吳服橋、
鍛冶橋、数寄屋橋、松の姿の常盤橋、雲の上なる一つ橋、二十の橋は一齊に面影を霞に映す。橋
の名所の橋の上。九百九十九の電燈の、大路小路に残つたのが、星を散らして玉を飾つて、其の
横笛を鏤むる。

清葉は欄干に上々しい。

甚平は手拭を鷲掴みで、思はず肩を聳かした。

「吹奏まし、〜。何の貴女、誰、誰が咎めるもので。こんな時。……不忍の池あたりでお聞き
遊ばすばかりでござります。」

「勿體ないこと。……」

と笛を袖へ、又うつつむいて悄れたのである。

河童の時計の蒼い浪、幽な水音。どぶりと一つ、……一時であらう。

鴛鴦

四十七

稲葉家のお孝は冷く成つた、有合せの猪口を呼吸つぎに呻、と一口。……で、薄ら寒いか兩袖を身震ひして引合はせたが、肩が裂けるか、と振舞は激しく、風采は華奢に見えた。が、すつきりと笑ひながら、

「それぢや、清葉さんばかり縹緞がよくつて、貴方は、だらしが無いんだわね。」

「先あ、然うなんだ。」と葛木は、打傾いて頬に手を置く。

「先あぢや無いぢやありませんか。立派に斷られたに違ひない。」

「そりや違ひない。」

「振られたのね。」

「ふられました。」

「ホーンと。」

「何も然うまで凹ますには當るまい。」

「嬉しいねえ。」

小兒らしいまで胸を揺つた、が、何故か氣が立つて胸の騒ぐのを、然うして紛らしたやうである。

葛木は、煙草の喫さしを火鉢に棄てた。

「其だがね……」

「未だ負惜み？」

「唯話さ。」

と苦笑して、

「別れに獻した盃を、清葉が、些と仰向くやうに、天井に目を閉いで飲んだ時、世間が最う三分間、もの音を立てないで、死んで居て欲しかつた。私の胸が、此の心が、何う成るか其が試して見たかつたが、ドシンばたん、と云ふ足音。隣室の醉客が總出ちに成つて、寝るんだ、座敷は、なんて喚いて、留める藝者と折重なつて、此方の襖へばたくと當る。何を、と云つてね、其の勢で、あ……開けるぞ、と思ふと、清葉が、膝を支直して、少し反身で、ぴたりと壓へて、（お客様です。）

橋本日

然う、屹として言つたんだよ。(誰だ。)と怒鳴ると、(清葉がお付き申して居ります。)と手に觸つた撥を握つて、すつと立つた——藝妓のひそめく聲がして、がたくと其處らが鳴つて静まつたがね……私は何だか嬉しかったよ。」

「情人らしく扱はれたやうな気がして? そんな負惜みをお言ひなさんなよ。」軽く卓子臺を掌で當てて、

「卑怯な、男のやうでもない。」

「否、そんな意味ぢや決して無いんだ。恥を祕して貰つたやうでさ。不出来をして女に振られた、戀の奴の、醜體を人目から包んでくれた気がしたから。」

「人目が何うして、そんな事ぐらゐる藝者が貴下、もしか其が旦那だつたら、清葉さんは何うするだらう。……一寸、此處へ、もしか私の男が、出刃庖丁か拔身でも持つて、蒼く成つて飛込んだら、私が何うすると、貴下思つてるの? 否、吃驚する事は無い。私だつて其のくらのな覺悟はして居る。」

大丈夫、然うすりや貴下の上へ、屏風に倒れて背に成つて、私が突かれる、斬られて上げるわ。何の、嫉妬の刃物三昧、切尖が胸から背まで突通るもんですか。一人殺される内には貴下は助かる。兩方遁げるから危いんだわ。ねえ、一寸。」

と、じりりと膝で寄つて來たが、目が覺めたやうに座を眺し、

「あら、何の話をしたんだらう、……あ、然う然う。」

お孝は何氣なく頷いて、

「清葉さんがお庇ひ遊ばして——まことに、お豪い藝者衆でいらつしやいます。」

「眞個、私は、しかし、

「しかし何うしたのさ。」

「姉に、姉の袖で抱かれた氣がした。」

「葛木さん。」

其のまゝ、衝と膝を掛ける、と驚いて背後へ手を支く、葛木の瘦せた背に、片袖當てて裳を投げ

て、
「そんなに姉さんが戀しいの。人形のお話は、私も聞いて泣いて居ました。眞個に貴下、そんなぢや情婦は出來ない。口説くのは下拙だし、お金子は無ささうだし、」

「謝罪る。」

「口説かれるのも下拙だし、氣は利かないし、跋は合はず、機會は知らず、言ふ事は拙し、意氣地は無し、」

「堪忍し給へ。」

「から、だらしは無けれど、たゞ一つ感心なのは惚れる事。お前さん、惚れ方は巧いのね。」

「情婦が無くて、寂しくつて、行方の知れない姉さんを探ねるツてさ、坊主になんか成らないやうに、私が姉さんに成つて上げませう。」

「御不足？ 清葉さんでなくつては。」

「那……那様事は……あゝ、息が塞るよ。」

「死んでお了ひよ。こんな男は國土の費だ。」

「酷い。」

と云ふ時、とんと突飛ばして、すつくり立つ、と手足を殘して燃ゆるやうに見えた。パチンと電燈を消したのである。

力の籠つた、情の聲。

「一寸、(サの字。)が見えなくつて？ サの字よ、私、葛木さん。」

「お孝さん。」

と僅に言ふ。

「暗い中でも、姉さんに見えませんか、姉さんしてくれませんか。自惚れてて？ 一寸自惚れ

だ、と思ひますか。清葉さんでなくつては——不可いの、不可いの。」

「眞暗だ。私は、眞暗だ。……」

「まだ、まだ、あんな事を。清葉さんでなくつちや、不可いの、不可いかい。」

「顔が見たい、お孝さん。」

「贅澤だよう。」

と婀娜な聲。暗中に留南奇がはつと立つ。衣摺の音するくと、霎時して、隔ての襖に密と手を掛けた、ひらめく稲妻、輝く白金、きらりと指環の小蛇を射る。

「眞個の、貴方の姉さんは私は知らない。清葉さんなら恐れはしない。藝で行けなきや、容色で……容色で行けなけりや藝事で、皆不可なけりや、氣で負けないわ。生命で勝つ。葛木さん、見

て頂戴。」

とすらりと開ける、と翠の草に花の影を敷いて、霞に鴛鴦の翼が漾ふ。

「あゝ、お千世は？」

と葛木が言つた。其は影も見えなんだ。

「枕を持つて、下階の女房の中へ寝に行きました、……一度でも藝者と遊んで、其のくらなる事が分らない。——さあ、ちゃんとして見て頂戴、サの字が見えない？ 姉さんに肖ない？……ええ、焦つたい。」

と襖に絶つて、暗い方へ退る男と、明る浮いた枕を見交はす。

「姉さんで可愛がられるのに不足なら、妹にまけて可愛がられて上げませう。従姉妹に成つてなかくしませう。許嫁でも、夫婦でも、情婦でも、私、まけるわ、サの字だから。鬼にでも、魔にでも、蛇體にでも、何にでも成つて見せてよ、藝人ですもの。」

と裳を揺つて拗ねたやうに云ひながら、ふと、床の間の櫻を見た時、酔つた肩はぐたりとしながら、キリ、と腰帯が、端正と緊る。

「何の、姉妹に成るくらる、皮肉な踊よりやさしい筈だ。」

搔卷の裾を渚の如く、電燈に爪足白く、流れて通つて、花活の其の櫻の一枝、舞の構へに手に取ると、ひらりと直つて、袖にうけつ、一呼吸籠めた心の響、花ゆらくと胸へ取る。姉の記念に豈劣るべき花柳の名取の上手が、思のさす手を開きしぞや。

其の枝ながら、袖を敷いた、花の霞を裳に包んで、夢の色濃き萌黄の水に、鴛鴦の翼に肩を浮かせて、向うむきに潰島田。玉の緒揺ぐ手柄の色。

「葛木さん。」

「……………」

「人形が寂しい事よ。」

生理學教室

四十八

お孝は黒繻子の襟、雪の膚、冷たさうな寝衣の装で、裾を曳いて、階子段をするくと下りると、其處に店前の三和土に蠱乎と立つた巡查に、一寸目禮をして、長火鉢の横手の扉を、すつと縁側へ出て行く。

其處が中庭に成る、錦木の影の浅い濡縁で、合歡の花をほんのりと、一輪立膝の口に含んだのは、五月初の遅い日に、じだらくに使ふ房楊枝である。

其の背後に、座敷が見えて、花は庭よりも其處に咲いて、眉の緑の年増も交る。

唯、下地子らしい十二三なのが、金盃を置いて引返して来て、長火鉢の傍の腰窓をカタンと閉めたので、お孝の姿は見えなく成つた。

とばかりで、三和土に立つた警官は、お孝が降りて来た階子段を斜に睨んで、髯を捻る事專なり。で、少時家中が寂然する。

一體、不斷は千本格子を境にして、やけな奥女中の花見ぐるる陽気な處へ、巡査と見ると騒動が豪い。謹むのでは無い笑ふので、キヤツ／＼クツ／＼、各自が彼方此方、中には奥へ驅込んで轉がるまで、胡蝶と鸚鵡が笑ふ怪物屋敷の奇觀を呈する。

事の起因を按ずるに、去年秋雨の降くらす、奥の座敷に、女ばかり總勢九人、然も二組に成つて御法度の花骨牌。軒の玉水しと／＼と鳴る時、格子戸がらり。

「御免。」と掛けた聲が可恐く嚴い蠻音。薩摩訛に、あれえ、と云ふと、飛上るやら、くる／＼舞ふやら、平胡と坐つて動けぬやら。

座敷では袂へ忍ばす金縁の度装の硝子を光々さした、千鳥と云ふ、……女學生あがりて稲葉家第一の口上言が、廂髪の阿古屋と云ふ覺悟をして度胸を据ゑて腰を据ゑて、最一つ近視眼を据ゑて、框へ出て、はツと悪く落着いた切口上。

「別に其のでございます。相變りました事はございません。と、戸籍係に立ごかしの三ツ指を極めたと思へ。

「羅宇が出来たけえ、……持つて来たですツ。」

「何だね、羅宇屋さん、裏へお廻り。」と、婆やが水口の障子で怒鳴ると、白磨竹を突きつけられた千鳥の前は、拷問の割竹で、胸を抉られた體にぐなりとした。

鍋焼餛飩は江戸兒で無い、多くは信州の山男と聞く。……鹿兒島の猛者が羅宇の嵌替は無い圖でない。然も着て居たのが巡査の古服、——家鳴震動大笑。

以來、戸籍檢べ、とさへ言へば、食ひかけた箸を持つて刎廻る埒の無さ。當區域受持の警官も、稲葉家では、(笑ふ。)と極めて、其の氣で髯を捻るのであつたが。

今日のは大に勝手が違つた。

「姉さんは内ぢやらうで。」

「はあ、あの……」

「是非、直接に逢ひたいんぢや……取次を頼むです。」

小女が一度、右の千鳥女史と囁き合つて、やがて巡査の顔を見い／＼、二階に寝て居たのを起した始末。笑ひ掛けたのは半途で壓へ、噴出したのは嘔込んで、いやに靜かな事仍て如件。

幽な咳してお孝が出た。輪曲ねて突込んだ婀娜な伊達卷の端ばかり、袖を這つて着流しの腰も見えないほどしなやかなものである。

「失禮をいたしました。」

「は、あんた覚えて居らるゝかね。」
唐突に言ふのが其で、お孝は一寸分り兼ねつゝ、黄楊の横櫓を壓へたのである。

四十九

「一寸分りますまい、ぢやらうかね、……先達て、三月四日の午後十二時の頃に逢うたのですか。」

「あゝ、一石橋の、あの時の。」

お孝は軽く傾いて居たのが屹と見直す。

「多日でした、いや、其の節は失敬ぢやつた。」

「否、私こそ失禮を。」

「む、聊か其の失禮で無いこともなかつたですね、ひやッ、ひやッ。」と壁に響くが如き力ある笑聲、笑ふのに力が有つて、敢て底意は無ささうである。

お孝は顔を洗つたばかりの、縁起棚より前へする挨拶とて、いつになく、もじくして、
「ついね、お白酒の持越して、酔つて居たものですから、ほゝゝ。」

と蒼くらんな内端な聲。

「お茶をよ、誰か。」

「然う云ふ心配をされては困る。……官服の手前もある。お宅などで餘り世話になつては不可んです。……雖然、一寸此處を拜借します。」

「さあ何うぞ、……貴官お上り遊ばしては。」

「此處で結構です。」

小女が心得て手早く座蒲團と煙草盆。

「御免下さい。」と外套を抱へたまゝ、ガチリと佩劍の腰を捌いて、框の板に背後むきに、かしつと長靴の腰を掛ける、と帽子を脱いで仰向けにストンと置いて、

「何は、一寸々々來らるゝかね。」と髻を捻る。

「誰方……でございますか。」

「何は、大學の國手は？」

「薩張……」と目が働いて、頬が緊る、お孝は注意深い色である。

「全然お見えに成らんですかね。」

「否、時……偶。」と、膝で二つばかり掌を軽く合せる。

「今度お逢ひでしたら、貴方から、私に、託を一つ頼まれて下さらんぢやらうかね。」
「はあ、お目に懸りました節は。——ですが、何時またお見えに成りますか。」と瞻らるゝ目を外して言ふ。

「別に急ぐと云ふ件では無いです。——今名刺を上げます。で、私が職務としてでは無い。一個人として、私一人として、ぢやね、……非常に先達では失敬した、詫をします、と貴方から能う言うて貰ひたいのぢや。實は其を頼みたうて、今日は私用のみで出向いて來たです。……いやいや一石橋の事のみではないです。」

實は、今週の金曜日、一昨日でした。私は非番だもんで、醫科大學へ葛木さんを訪問したです。可えですか。……と云ふのはぢやね、先夜、彼の場合、貴方が不意に出て來られて、私が疑問的とした、不審を實際に示して、證明をされたもんで、其れ以上追究は出來兼ねる都合で手を放した。

尤も孰にせい、私が思うたほどの事件で無い、とだけは了解したのぢやけれども、醫學士などは、出たら目ぢやらう。又、あの年配で、それが今日堂々たる最高の學府に氏名を列する一員であらるゝものがぢやね、……學問上、蛙の腸や、モルモットの骨を新聞紙に包んで棄てるならば、幾分かいはれはある。それも必ずしもあるべき事實とは思はんのぢやがね。

榮螺と蛤、姉の志と云うて、雖にそなへたを汐に流す、——そんな事が。私は斷じて信ぜんのぢや。」

と今も尙且つ信じないやうに、澁に朱を加へた赤い顔で——信ぜんのぢや！——

五十

巡查は其處に注いで出した茶を、喫まず、じろりと見たばかり。

「事態、私も怪訝に堪へんもんで、早急とは無しに、本郷方面へ、同僚の筋を手繰つて捜りを入れると、葛木晋三と云ふ醫學士は如何にもあるぢやね、而してです、其は醫科に勤めて居らるゝが、内科、外科、乃至婦人科、何でも無いのぢや。大學内の其の、生理學教室に居つて研究をされつゝある……」

と眞顔にお孝に打傾いて、左の手の自脈を取りつゝ、

「まるで此の方には關係ない。純粹の其の學者ぢやとある。で、尙ほ怪いですわい。其の晩の舉動なり、……あの餘り……貴方の前ぢやけれども、風采の上らん、瘦せた、薄髻のある、背の屈んだ、恚う、突くとひよろひよろつとしさうな、人に口を利くにおどくする、初心らしい、易つばい、容子と云ふのがぢやね、

人品備はらんですぢやらうが、何うですかね、……きやツ、きやツ、きやツ。空咳きに咳入る如く、肩を揺つて高笑ひをする。

「さあ」と云つたが、ほ、とばかり、此の際困つたと云ふ片頬笑みをして、一寸指先で疊をこすり状に、背後を向いて、も一度ほ、と莞爾すると、腰窓を覗いて居た、島田と銀杏返が、ふつと消える。

巡査は、乃ち髻を捻つて、
「怪しいものではあるまい。後暗い事は、其は無いのぢやらう。がです……あの晩の人間は名を騙つた者に相違無い、と何うしても疑はれて成らんもんで。好奇心にも驅らるゝですわ。非常に思切つて、醫科大學に刺を通じて面會を求めたです。そりや、貴方、通常服で、そして小倉ぢやが袴を着けて出向いたけえな。

何うか思つたが、取次いだ小使どんが、や、暫時あつて引返して、お目に掛らう言はるゝ、通れ、とあつて、廊下傳ひ方角を教はつて、而して其れから歩行き出したがね、——私は先年此岐阜縣下ですわ、飛驒の或山家邊僻に勤務した事があつて、深い谷陰、高い崖に煙草の密造をする奴を検べに行つたのぢやね。其の節、路も無い處を、所謂、木の根巖角です哩。時々藤蔓にぶら下つて、激流の空を綱渡などしたが、いや、見當の着かぬ心細い事は、——門外漢が學校の其の

奥へ行く廊下傳ひは、奥山を歩行く所では無かつたです。

日も西山に没して、前途尙ほ遙なりと云ふ、遠い向うの峠見たやうな處に、大なる扉の戸を、細う開けて、背にして、すつくりと立つて、此方を出迎へて居られた。峰の一本の松と云ふ姿に見えたのが、何と驚いたねえ、あの晩の少い紳士ぢや、國手ぢやつたで。

ぴたりと留まつて、思はず、舉手の禮を施したですよ。常服では可笑いのぢやが。すぐに此へ、と言はれて、大なる扉を入ると、ズシンと閉つたと思はれい。稻妻のやうに、目を射られたのは、室一杯に並んだ書架に、ぎつしりと並んだ、獨逸語ぢやらうね、原書の背皮の金文字ですわ。

暮方の空に、此が何うですか。紺地に金泥の如く、尊い處へ、も一つの室には名も知れない器械が、淨玻璃の鏡のやうに、まるで何です、人間の骨髓を透して、臟腑を射照らすかと思ふ、晃晃たる光を放つ。

私は、よろゝと成つたで。あの晩、國手が、私のために、よろゝと成られた如くぢや。何と、俗に云ふ餅屋は餅屋ぢや、職務は尊い。と沈着に、腕を拱く。

「其の器械と、書架の有ると、國手兩室を占領して居らるゝ様子ぢやねえ——傍には寢臺も有つたですよ。柱の電鈴を壓さるゝと、小使どんが紅茶を持つて來るのぢやつた……」

私は卓子の向ひに、椅子を勧められて眞四角に掛けたのぢやが、硝子窓から筑波山の夕日が射して、其の生理學教室を燦と輝かした中に、國手の少い姿が、神々しいまで見えた。

一應話を聞いたです。私もね、出來得る限り、行政官の一員たる其の威嚴を保つてからに。然し、決して警官として訊問をするではありません。既に一石橋當夜の紳士と、生理學教室に於ける國手とが同一人である事を確めた上は、些少たりとも犯罪に對して何等其の疑ひは無いのであります。が、お話の如き事が事實有り得るものか何うか、後學の爲め、一種人情に對する警官の經驗の爲に、云うて、其の室で飾ると云はれた、錐を見せて貰うたです。

國手、一個の書架の抽斗、其には小説、傳奇の類が大分帙を揃へて置かれた——中から、金唐革の手箱を、二個出して、其を開けると無造作に、莞爾々々しながら卓子の上に並べられた。一錢錐ぢやね、土人形五個なのです。が、白い手飾の、あの綺麗な手で扱はれると、數千の操絲を掛けたより、もつと微妙な、繊細な、人間の此の、あらゆる神経が、右の、嚴肅な、緻密な、雄

大な、神聖な器械の種々から、清い、涼い、芬と藥の香のする室の空間を顫動させつゝ傳つて、錐の全身に颯と流込むやうに、其の一個々々が活きて見える……

就中、丈、約七寸許の美しい女の、袖には櫻の枝をのせて、一寸うつむいた、慄然するやうな、京人形……髪は、

と言ひ掛けて、お孝の姿を更めて見て、

「貴方、貴方の其の髪と同一に髪を結うた人形ぢやがね。」

お孝は俯向いて、しやんと手を支く。

「其は何と云ふ髪の結びかたですかね。」

「潰……」

「はあ？……何ですかね、覚えて置くで失禮します。」と、手帳を出す。

お孝の上げた顔は、颯と暎が染つたのである。

「あの、潰島田でございます、お人形さんの方は結構でせうけれども、此はまことに其の潰しの

利きませんお恥しいんですよ。」

「否、潰しなんかきかんで可えです。貴方は既に葛木さんの。」

隅の階子段を視て空ざまに髻を扱いた。見よ、下なる壁に、あの麗の毛皮、大なる筒袖の、抱

着いた如く膠頰として掛りたるを――

「巡查は心付いた目をお孝に返して、

「貴方、大抵の事は、此處で饒舌つて可えですか。或種の談話は憚らんでも構はんですかい。」

「え、く、」

と懐を廣く、一膝出ながら、

「些とも……お氣に入りましたら、私をすぐ、お口説きなすつても構ひませんの。」

「きやツくきやツ。葛木さんの奥さん。何ないしてかい？……」

「まあ、そんな事こそ、先方さまが御迷惑です。」

「否、然し、其の積りで出向いて来たで。」

「羽織を。寒い。……そして私にも煙草をおくれな。」

美 舉

五十二

「さあ……何の話ぢやつたかね、其處で。」

「貴方、其の潰島田に結つたお人形さんですわ。」

「然やう、……就中、其が、葛木さんの目と一所にぱちくと隣りするぢやね、――聲を曇らして、姉と云ふ御婦人の事も言はれた――

私は別世間を見たです。異つた宇宙を見たです。新しい世の中を發見して寧ろ驚異の念に打た

れた。……吃驚したんぢやね、何の事は無い。

嘗て、其の岐阜縣の僻土、邊鄙に居た頃ぢやつたね。三國峠を越す時です。只今、狼に食はれ

たと云ふ女の檢察をしたかね、……薄暮です。日歸りに山家から麓の里へ通ふ機織の女工が七人

づれ、可えですか。……峠を最う一息で越さうと云ふ時、下駄の端緒が切れて、一足後れた女が

一人キヤツと云ふ。先へ立つた連の六人が、ひよいと見ると、手にも足にも十四五疋の、狼で

蔽被さつた。――身體はまるで蜂の巣です哩。

私は反對の方から上りか、つたんでね。峠から驅下りて来た郵便脚夫が一人、(旦那、女が狼に

食はれて居ります。)と云ひ棄てて、すたく行きをる。――あとで、其の顔を覚えとつたで、(何

故通りか、つて助けんかい。)……叱つた處で、在郷軍人でも無し仕方が無い。然う云ふ事も現在

見た。

橋本日
又、山の中に、山猫と云ふのが居る、形は嘗て見せん。見たものは無いと云ふです。唯深更に

及んで其の啼聲ぢやね、此を聞くと百獸悉く聲を潛むる。鳥が塒で騒ぐ。昔の狝々ぢやと云ふ。非常に淫猥な獸ぢやさうでね、下宿した百姓の娘などは、其の聲を聞くと震へるです哩、——現在私も、其は知つとる。

炭焼の奴が、女を焼いて食つた事件もある。

然う云ふ事は知つとるが、趣味と情愛の見聞が少かつたためぢやらうか、醫學士が生理學教室で、雛を祭る、と云ふは信じなかつた。——吹く風はなこそこの關と思へどもですわ。」

と嘆息して、髻に掛けた指を忘れた。

「鎧の袖に櫻のちら／＼とかゝると云ふ趣も、私の其の了簡では嘘にせねば成らんぢやつけえ。恥入るです——一個人としてぢやが。」

巡査は、するりと靴をすらしめて、佩劍の鞘手に居直つたのである。

「で、國手に大に謝さうと思ふ處へ、五六人、學生とは覺えない、年配の、堂々たる同僚らしいのが一齊に入つてござつたで、機を考へて、其れなりに歸つたです。

此の意をぢやね、願はくは貴方から國手にお傳へのほどを偏に希望します。私は職務上の過失であらば責を負ふです。其は別問題として、——私は、貴方から御挨拶を願ふのが、尤も其の道を得たものと信するのぢや。

就てはです。私は没分曉漢の一巡査であるが、生理學教室に雛を祭ることに於て、一石橋の臘月一片の情趣を會得した甲斐に、緋緘の鎧の袖に山櫻の意氣の羨しさに堪へんで。

十年勤務の間、唯一の美擧として、貴方に差上げたいものがある。

……奥さん。」

「……………」

「言うても構ひませんな、奥さん。」

「嬉しいんですよ。」

と聲が迫つて、涙が美しく輝いた。

「一生に一度ですわ。」

「葛木の奥さん、……學位年齢姓名と並べて、(同じく妻。)と認めた手帳の一枚です、お受取り下さい。」

出すのを取つて、熟と俯向く、……潰島田の、水淺黄の手柄のはら／＼と揺るゝを視ながら、

冷めた茶碗を不器用な手つきで、取つて陰氣に一口、かぶりと呑むと、ガチリと立つて舉手した

切、たゞの巡査に成つて格子を出た。

此の巡査が、本郷を訪問した時の光景は、彼が爰に物語つた通りであつた。それさへ、神境に

白き菊に水ある如き言ふべからざる科學の威嚴と情緒の幽玄に打たれたのに——やがて仔細有つて、此の日の午後、赤熊の毛皮を其のまゝ、爪を磨ぎ、牙を嚙んで、喘ぐ猛獸の如くに成つて、生理學教室へ、日本橋から本郷を一飛びに躍り込んだ……海産商會の五十嵐傳吾は、それは又思ひの外意氣地の無いものであつた。

大學の廊下を人立して、のさ／＼と推寄せた傳吾が、小使に導かれて、生理學教室の扉に臨んだ時、呀、戀の敵の葛木は、籐の脇つき椅子に柔く腕を投げて、仰向けに長く成つて、寝ながら巻煙を喫んで居た。……が、客來る、と無造作に身を起して、カタリと大床に靴を据ゑた。其の音さへ、訝するまで、高い天井、大空に科學の神あつて彼を守護する如くであるのに、搦て加へた學友が、五人の數、彼を取巻いて、恰も迷宮の奇き灰色の柱の如く、すく／＼と居合はせたのが、希有な侵入者を見ると、一齊に傳吾に瞳を向けた。知らずや、其の中に一人外科の俊才で、渾名を梟と云ふ……顔が以たのではない。いかもの食の大腕白、嘗て御殿山の梟を生捕つて、雜巾に包んで、暖爐にくべて丸蒸を試みてから名が響く、猫を刻んでおしやます鍋、モルモットの附焼、聊か苦いのは、試験用の蛙の油揚げと云ふ、古今の豪傑、千場彦七君が眞黒な服を着けて、高い鼻に、度の強いぎら／＼と輝く眼で、ござんなれ、好下品、麗の皮をじろりと視て、頭から鹽を附けたさうにニヤリと笑つた。——此の威にや恐れけむ。

傳吾は扉の敷居口に、へた／＼と腰を抜くと、麗の筒袖の前脚めいた奴を、もさりと支いて、土下座して、

「途惑をいたしました。」

とばかり、口も利き得ず、す／＼と逡巡して歸つたのである。

仔細は云ふまでもない。……大概様子でも知れよう。前夜から、稻葉家へ泊り込んだのが、其の二階を去らず、お孝に愛想づかしをされて突出されたのであつた。

却説……巡查が格子戸を出ると、やがて××署在勤笠原信八郎とある名刺にのせた、(同妻)を熟と視て居た、稻葉家のお孝は、片手の長煙管をばたりと落して、すつと立つと、頂いて、長火鉢の向う正面なる、朝燈明の清く輝く、縁起棚の端に上せた、が、黙つて伏拜んで、座蒲團に居直つた時、眉を上げつ、流眄に、壁なる麗の毛皮を見た。

「千世ちゃんは？」

煙草盆を引きながら少女が、

「お稽古ですの。」

「春子さん、夏次さん、千鳥さん、萩代さん、居なさるか。皆一寸來ておくれと、然うお言ひ。……私、話したい事がある。」

怨靈比羅

五十三

——「露地の細路、駒下駄で。」——

カタ／＼と鳴る吾妻下駄、お竹藏向の露地を、突袖して我家へ歸る、お孝の棲は、幻の夜が深かつた。

「姉さん、姉さん。」

と呼ぶ、可愛い聲。

一時、藝者の數が有餘つたため、隣家の平屋を出城にして、桔梗、刈萱、女郎花、垣の結目も玉章で、亂杖逆茂木取廻し、本城の欄の青簾は、枝葉の繁る二階を見せたが、近頃ははれあつて世帯を詰めて、稻荷様向うの一軒につめたので、隣家は恰も空屋である。

其處まで戻ると、我家の格子戸前の木戸を細めに開けて、差覗く島田を見た。

「千世ちゃんかい。」

お孝は、すつと来て、年上の女の落着いた聲を沈めて、

「何うおしなの、お前さん最う寝て居たんぢやないのかい。」

「え、寝て居たんですけれど、私、國手がお歸んなさるのを、姉さんが送つて出て、此の木戸で、何だか話していらつしやるのが寂しく聞えて、知つて居たんですよ。カタ／＼と足音がして出ておいでなさいますから、あの、ぢや露地口までお送りなすつたんだ、然う思つて居ましたけれど、それにしては餘り遅いんですもの。」

何時までも、お歸んなさいませんし、それだし、あの、一度お寝つたんですから、姉さんは寢衣でせうのに、何うなすつた知ら。……私、心配で……此處まで起きて来て、あの、通へ出て見ようと思つたんですけれど、可憐いでせう。……それですから、あの、此處につかまつて震へて居ましたの。」

「何だねえ、そんな弱蟲が、それぢや、来てくれたつて何にも成りやしないぢやないか。」

と口では笑ひながら、嬉しい目で。其の癖もの案じの眉が擡む。……軒の柳に霧の有る、瓦斯ほの暗き五月闇。淺黄の襟に頬白う、……又雨催の五位鶯が啼くのに、内へも入らず、お孝はイむ。

橋本日

「何うかしたの、姉さん。」

「否、何うも爲やしないがね、私ね、何うしようかと思つて居るんだよ。千世ちゃん、一寸此處

へ来て御覽。」

「はあ。」と、お千世は何の氣なし、木戸を内へギイと引く。

「静によ、誰か目を覺すと面倒だから。」

「あい……何、姉さん。」

「一寸、木戸の此の柱に、こんなものが貼つて有るだらう。」

お千世は、薄氣味悪さうに、お孝の袂に掴まりながら、直ぐ目の前なを、爪立つて覗くやうに、唯見ると、比羅紙の、凡そ二枚舩ぐるな大ききの真中にぼつりくと筆太に、南無阿彌陀佛、と書いたのが、じめくとして、宛然、水から這上つた流灌頂の如く、朦朧として陰氣に見え

る。

「可厭、姉さん、何？一寸。」

お千世は息を切つて震へ聲。

「性が知れてるから些とも氣味の悪いことは無いんだよ。」

お聞き、前刻、國手が來なさりがけに、露地口を入らうとして、偶と、そら、其處の松家さんの羽目板を見なさるとね、此の紙が、丁度、入口の取着きの處に貼りつけて有つたとさ。

巻煙草を買ふのだつけ、と其の拍子に氣が付いて、表の小母さんの許へ行つたんださうだけ

ど、最う寝て居たんだつて。

今夜は、來やうが遅かつたわねえ。」

五十四

「國手はね、それから仲通まで買ひに行つたんだとさ。……そしてねえ、一本喫かしながら入つて來ると、見たばかりで、最う忘れて居たくらるだつたのが、又ふつと氣が付いて、あ、此處に有つたつくと、お思ひの、それがお前、前の處には無くつてさ、同じ羽目板だけれども、足數七八つ、二間ばかり奥へ入つた處に、仇白く成つて字が見える、……紙が歩行いた勘定だわねえ。」

「姉さん。」

「可恐くは無いんだつてばさ、此の娘は。」

とお千世の肩を抱込んで、

橋本日

「何かお禁厭でもあるかいッて、國手がね、内で私にお話しなの。……何でせう、月日も、堂寺も記いて無ければ、お開帳の廣告でもなからうし、別に、そんなお禁厭が有るッてことも聞きません。變ですな、……然う云つて居たんだがね。」

お歸りなさるのを、榎まで見送つた時、私何だか氣に成つてね、行つて見ませうよつて、下駄を突掛けて出ようとすると、(お止し、密と那樣ものを貼つて置いて、それを見たものに、肺病か何か當の病人から譲渡して、荷を下さうなんのつて、よくあるこつた。……お前は女だから神經を起すと不可い、私は工面の悪い藪のかはりにや、大地震の前兆だつて細露地を抜けるのは氣に成らないから。)

申戲半分然う言つて、國手は平氣なだけどもね。もしか禁厭なら何うしよう、(貴方は擔がないでも、荷を見せて可いもんですかつてさ、……災難なら切つて半分、私が背負ひませうよ。)とばたすた急いで格子をついて出ると、お前何んだらう……

そら此處へ来て居るのさ。

羽目を傳はつて、木戸へおいでなすつたんだわ。私も慄然と總毛だつた。

はてな、字が殖えて妙な事が書いてある。前刻見たのは念佛ばかりで、こんなものは無かつたつて、御覽。」

と云ふ、南無阿彌陀佛の兩傍に、あひく傘の樂書のやうに、(となへろくくとなへろ)と蛞蝓の如くのたくり廻る。

「國手がね、(何だ、淨土か眞宗にも、救世軍が出来たんぢやないか)つて笑つたけれどね、……

私はドキリとしたんだよ。假名の形を一目見ると分つた。お念佛を(唱へろく)——覺悟をしろ——つて謎ぢや無いか。こりや、お前、赤熊の爲業だあね、あの、鯨野郎の。」

「まあ、熊兄さん。」

「止しておくれ。」

はたくと袖を拂いて、

「身ぶるひがする。いつかお巡查さんの來なすつた朝、覺悟が有つて長棹に掛けてから門傍へも寄せつけない。其を怨んで、未練も有つて、穴から出たり入つたり、此處等つけ廻して居るに違ひない。何の男のやうでも無い。のツそりの蝦夷なんか、私は何とも思はない。悪く形でも顯して見たが可い。象牙の撥があるものを、拂き殺しても事は濟む。——國手の身のまはりをつけ廻されるんだと、ね、千世ちゃんや、姉さんは本當に案じられる。

角の紀田屋まで送つて行つて、車を然う云つて歸して來たがね、獸は驅けるのが疾いやね、車にも乗れば乗るだらう。——泊めたかつたが、お肯きでなし、……」

とお孝は獨言のやうに云つて、

「途中で、又然うでも無い、新聞にお名前が出るやうな事なんぞ無ければ可いが、と氣を揉む頬の後毛は、寝みだれて尙ほ美しい、柳の絲より優しいのである。」

「姉さん。」

お千世が顔を覗いて、

「縁起棚へお燈明をあげて、そしてお祈をしませうよ。私も拜みますわ。」

「嬉しい娘だね。」

と頬摺したが、襟を合せて凜として、

「お待ち、私、考へた。……お稻荷様へお百度を上げよう。」

とて見返る祠は、瓦斯燈の霏を曳いて、空地に蓮の花の紅いが如く、池があるかと浮いて見える。

「数取りにはね。」

と云ふより早く、ぴり／＼と比羅紙を引剥がす……

「此を裂いて紙捻にしようよ、——人を呪はば穴二つさ。見たが可い。」

氣の立つたお孝は、袂を引上ぐるより前に、雨霽の露地へ、ぴたと脱いだ、雪の素足。

意氣地も張も葉がくれの間に、男を思ふあはれさよ。鶴を折る手と、中指に、白金の白蛇輝く

手と、合せた膝に、三筋五筋觀世捻、柳の絲に、もつれ纏る、鼓の緒にも染めてまし。

あはれ、恚る時は、あすの逢瀬を樂みに、歸途を案ずるも心ゆかし、寐られぬ夜半の待人掛け

る、小さな犬も拵へ交せて、お千世に背打たれて微笑もしたか。

柳の葉の散る頃は、——續いて冬枯の二日月、鬢櫛の折れたる時は——

一口か一挺か

五十五

——露地の細路駒下駄で。——

男が口の裡で、フト唄つて、

「不可んぞ、此は心細い。」と、苦笑ひをしながら立直つて、素直に杖を支くと、其ま、渡り掛け

たのは一石橋。月はないが、秋あかるく、銀河の青い夜の事。其は葛木晋三である。

露地に吾妻下駄カタ／＼の婀娜な女と因縁のある、唄の意味も心細いが、お孝が投遣りに唄ふ

のは、勝氣と膽勇を示すものと云つて可い。其の口癖がつい乗つた男の方は、虚氣と惑溺を顯す

ものと、心付いた苦笑も、大道さなか橋の上。思出し笑と大差は無いので、此は國手我身ながら

(心細い。)に相違ない。

其の虚に憑入る、魔はこんな時に魅す、とある。

今、橋の上を欄干に添つて、日本銀行の方へ半ば渡り掛けると、橋詰の、あの一石餅の、早や門を鎖した軒下に、大なる立ん坊の迷兒の如く蹲つて居た男がむら／＼と立つと、ざわ／＼と毛の音を立てて、鼻息を前にハツハツ獣の呼吸づかひ。葛木の背後に迫つて、のそつと前へ廻ると、両手を掉つた不器用な、意氣地の無い叩頭をして、がくりと腰を折つて、

「國手、お願ひ！」

と喘いで云ふ。

はつと一歩あとに退いて、立停つて、見透して、

「何だ、何ですか。」

彼の影の黒く大なるに對して、葛木の手のカウスは白く、杖は細かつた。

「直訴であります、國手。」

「直訴とは……？」

「直訴とは、……直訴とは、切、切羽詰つたです、生命がけで、歎願をします。貴方を將軍家だ思つて、橋から青竹を差出します。俺は佐倉宗五ですのだから、え、此の願を聞届け遣はされりや、殺されても、俺、礎に成つても可えのです。國手。」

「何です。……唐突に、と云ふだけけれども、私はお前さんを知つて居ます。又、お前さんも知

らないとは言はせませぬ。そしてお頼みと云ふのは何です。」

「國手、御診察が願ひてえだな。」

と、粗雑に太く云つた。が、口覺えに練習した、腹案の口上が中途で切れて、思はず地聲を出したらしい。……で、頭を下げて赤熊は橋の上に蹲る。

四五分では、話の梟は着ないと覺つたらう。葛木は巻煙草を點けた。燃えさしの燐寸をト棄てようとして水に翳すと、ちら／＼と流れる水面の、他の點燈に色を分けて、錐の松明の如く、軸白く桃色に、輝いた時、彼は其處に、姉を思つた。潰島田の人形を思つた、榮螺と蛤を思つた、吸口の紅を思つて、火を投げるに忍びなくつて、——橋に棄てた。

此と齊しく、どろんとしつゝも血走つた眼を、白眼勝に仰向いて、赤熊の筒袖の皮擦れ、毛の落ち、處々、大なる斑をなした蝦蟇の如きものの、ぎろ／＼と睨むを見たのである。

が同時に又、思出の多い此處の頼母しさを感じて、葛木は背後に活路を求めぬのを忘れつゝ、橋の欄干に、ひた、と其の背を凭せた。

五十六

葛木は從容として云つた。

「お前さん、診察が頼みたい？……然うすりや死んでも可い。そんな解らない謎見たいな事を書かないで、判然と、石か、瓦か、當つて碎けたら可いぢやないか。私も診察なら病院へ來給へな」と廻りくどいことは言はないから。」

「實際、願ひたい次第でして。就てはで、御覽の通り、着のみ着のま、だ云ふうちにも、擦切れた獸の皮一枚だ、國手。雨露凌ぐ軒はまだしも、堂社の縁の下、石材や、材木と一所にのたつて居る宿なし同然な身の上で、御挨拶も手續も何も出來ねえです、其處で以て直訴だ、ね、生命がけで願えてえだな。」

「本當の診察なら、私は不可い。まるで脈を一つ持ったことの無い、自分の風邪をひいたのは葛根湯を飲んで、それで治る醫者なんだ。此方も謎のやうなことを云ふんぢやない。事實だよ。診察は、から駄目なんだよ。」

「決して其は脈を取つて貰ふには當らんです。で、唯國手の口一つだなあ。」

「口一つかね。」

「然うですわ。」

「何うするんですか。」

「四の五の無いで、唯一言、（お孝に切れる。）云うて下さりや可いのですのだい。」

「大方そんな事だらうと思つたよ、……此の診察は當つたな。」

葛木は莞爾しながら、

「折角だ、が、君、頼まれないよ。」

「何で頼まれん、何で。ありや俺の生命ですが。」

「私の生命かも分らんのだ。」

「俺の女房だ事、知らんのかい。」

「私は藝者だと思つて居るかね。」

「何でも可い。」

とドス聲で忙込みながら、

「素張切れてくれ、頼むでな。」

「女に言へ、女に、……先方で切れれば其迄よ。人に掛合はれて、自分の情婦を、退くも引くも

あるものか。」

「……自分の情婦。……え、堪らん、俺の前でお孝の事を。……うゝ、筋が引釣る、身體が震へ

る。生命とも、女房とも思ふ女を引奪られた戀の敵に、俺の口から切れてくれ頼むと云ふは、これ、

よく／＼の事だ思はんですだか。

女に云うて背く程なら、遠くから影を見ても、上衣の熊の毛まで蟲々立つお前んに、誰、誰が頼む、考へんかい。」

「私も同じことを言ひたいな。女が背かないほどのものを、男が掛合はれて引退る奴がありさうな事だと思ふのかい。」

「俺を人間だと思ふか、國手。」

赤熊はすつくと立つた。

「悪魔だ、鬼だ、狂人だ、虎だ、狼だ。……爲にならんぞ！」

「あゝ、其の上にもまた熊でも可いよ。」

「汝！」

葛木は欄干に杖を倒して、柔に手を拂いた。

「刃物を持つてるか。」

「むゝ、持たんことがあるもんだか。」

「二口あるか、二挺持つてるか。」

「何うするだい。」

「一口渡せ、一挺貸せ。——持たんのか。一本しかない刃物なら、暗撃にしる。離れて狙へ。遠くから打て。前に廻つて、名告掛けて、生命の與奪をすると云ふに、敵の得ものを用意しない奴があるものか、はゝゝゝ、馬鹿だな。」

艸冠

五十七

「あゝ、言はつしやる。」

赤熊は身構、口吻、さて、急に七つ八つ年を取つたやうに老實に力なく言ふのであつた。

「今言はしやつたは度胸で無いで。膽玉で無いです。學問の力だ。國手の見識ですわい。」

詫入りますで、はい。

橋本日

固より將軍様に直訴する云うたほどです、はじめから國手の身體に向うて手を擧げうとは思はんです、ものは發奮だ、赫としたな。そりや刃物措け、棒切一本持たいても、北海道釧路の荒土を捏ねた腕だ、此の拳一つでな、頭ア胴へ滅込まさうと、……ひよいと抱上げて、ドブンと川に溺める事の造作ないも知つたれども、そりや、あれを見ぬ前だ。

あれよ、……あの、大學校の大教室に、椅子で煙草を喫んでござつた、人間離れのした神々しい豪い處を見ぬ前だ——あれを見た目にや、こんな其の、土龍見たやうに成つて了うた俺が手で、危いことするは餘り可憐ものだ思ふ氣が、ふいと起つて何うにも出来ねえのですのただで。

其ともに、喃、國手、お前んの生命を搔拂ひさへすりや、お孝との振が戻つて、早い話が舊々通り言ふことを背いて、女が自由に成る見込さへあればですだ、それこそ、お前んが國手でも、神でも、佛でも、容赦する氣は微塵も無いだ。

無いだ。が、お前んに逢つて、機嫌の悪る事でもあつた日には、家中に八ッ當りで、十言云ふことに、一口も口を利かぬ。愚に返つた苦勞女を何うするだね。お前んの身に異常がありや、女も一所に死ぬですだらうで、……然うなれば何う成るですだい。

國手、俺は、あの女は生命より大事です、死なうにも死に切れん。生きとるにも生きとられん。

國手、顔を見られないくらゐなら、姿だけも見るが可えし、姿さへ見られんなら聲ばかりも聞くが増だし、其の聲さへも聞かれぬなら、蹙音でも聞いて居たい。其の蹙音にすらくと衣服の觸る音でもせうなら、魂に綱をつけて、するく引摺り引廻されて、胸を引搔いて、のた打廻るだ。

お前ん、誰も知るまいし、又知らせるやうにもせんですが、俺はお前ん、二階から突出されて、お孝の内に出入りが出来なく成つてからは、天に階子掛けるやうに逆せ上つて、極道、滅茶苦茶、死物狂ひで、潰れかけた商會は煙にする、其が爲めに媽々は死ぬ。

「女房が——死んだ。」と、學士は鋭く口早に言返す。

「二歳に成つた小兒は棄てる。」

「……………」

「木賃泊りの天井裏に、晝は内に潜つて、夜に成ると、雨でも、風でも、稲葉屋の周圍を、胡亂つき廻つて、稻荷さんの空地に躡んでも居りや、突當りの黒塀に附着いて立明す……然うして聲を聞く、もの音を考へるですだい。」

過日來から、隣の家が空いたです、此の頃では、大概毎晩、あの空屋で寝て居るですだ。」

「空屋でかい。」

と、驚いて云ふ。

「國手、お前んは又毎晩のやうに、蛇が蟠を巻いて居る上で、お孝といちやついてござる勘定だ。」

が、俺の方は、おつけ晴れて、許して縁の下へ入れて置いて貰ふ方が、隠忍んで隣の空屋に潛

るよりも希望です。襟の邊を引搔くと、爪を銜へる子供のやうに、含羞む體に、ニヤリとした、が、其のまゝ、何を嚙むか、むしやくと口舐づる。

五十八

「尙だ慾の言へば、お前んとお孝と對向で、一猪口飲る處をです。敷居の外からでも可い、見て居たいものです。」

お孝を俳優で、舞臺だ思へば、何として居られても、顔を見て聲を聞く方が、木戸に立つて考へるとるより増だからな。」

俯向いて半ば泣き、
「嫉み猜みは、未だ慙うまで惚れない内だと考へるで。」

初手はね、お前ん、喧嘩した事も、威した事もあるです。現に國手、お前んの大學病院の何とか教室へ俺が推掛けて、偉い人たちに吃驚して遁げて返つた、あの朝です。忘れんすかい。——稲葉家の格子へ巡査が来て、お孝にお前んの身の上話

うて、情事の免許状やうなものを渡いて歸つた。お孝が、直ぐに内中の藝者を茶の室へ集めて、です。嗚、國手。

（私は今日からおかみさん、然う思つて附合つておくれ。其のかはり、私も其の氣で附合ふから、借金なんか、まけて欲しい人には直ぐに目の前で帳消しに棒を引きますよ。——だ、お前ん。

其の勢で二階へ歸つて来ると、未だ顔も洗はんで居る俺を捉まへて、さあ、突然歸つておくれです。……藝者なら旦那が有らうが、何が来て居やうが構はない。それが可厭ならお止しだけれど、極つた人が出来た上は、片時も、寢衣で胡坐かいた獸なんぞ、備前焼の置物だつて身のまはり六尺四方は思な事、一つ内へは置けないから、即座歸れ。……云うて生眞面目ですかい。

俺、はじめは笑つたです。が、怒つたです。愚痴言つた。……頼みもしたですの。耳にも入らないで、（汚らはしい、こんな物を。）お前ん、お孝が蒲團を取つて向うへ匆ねると、其の時ですわい。豫て國手の事を俺嗅ぎつけて知つとつたで、お孝を威しつけてくれうとな、前の夜さり、懷中に秘して居つたですれども、顔を見ると、だらけて、はや、腑が抜けて、其のまんま、蒲團の下へ突込んで置いた、白鞘の短刀が轉がつて出たです。

お孝が見たでな。天道時節此處だ思つて、（阿魔覺悟があるぞ！）睨んだです。ばたくとお孝が立つて、占めた、遁げる、恐れたぞ。俺が勝つた、と乗掛つて、階子段の下口で捉まへたは

可かつたですれど、何うですかい。

お孝は逃げたで無いですが。……あの階子は取外しが出来るだでね、お孝が自分でドンと突いて、向うの壁へ階子をば突はづしたもんです。短刀をお抜き、さあ、お殺し、殺しやうに註文がある。切つちや不可い、十の字を二つ兩方へ艸冠とやらに目をかいて。とお前ん、……葛木と云ふ字に、突いて殺せ。(名まで辛抱は出来まいが、一字や二字は堪へて見せよう。さあ早く。)と洞爺湖の雪よか眞白な肌を脱いで、背筋のつるつると朝日で溶けて、露の滴りさうな生々とした奴を、水浅黄ちらめかいて、柔りと背向きに突着けたです。で。

豊艶と覗いた乳首が白い蛇の首に見えて、むら／＼と鱗も透く、あの指の、あの白金が、其のまゝ活きて出たらしいで、俺は此の手足も、胴も、じな／＼と巻緊められると、五臓六腑が蒸上つて、肝まで溶融けて、蕩々に膏切つた身體な、——氣の消えさうな薫の佳い、濕つた暖い霞に、虚空遙に揺上げられて、天の果に、蛇の目玉の黒金剛石のやうな眞黒な星が見えた、と思ふと、自然に、のさんと、二階から茶の間へ素直、棒立ちに落ちたで、はあ。

と五十嵐傳吾は腹を搔つて、肩を揉んで、溜息して言ふ。

河岸の浦島

五十九

「其の足で、お前ん、大學に押掛けてからは、御存じの通りだで。

さあ、後の、俺が身體何う成るだね。

天人に雲の上から投落されたも、お前ん、勿體ないだが、乙姫様に海の底から突出されたも同一です。

又始めに、お孝が俺のものに成つた時は、知つたほどの誰も彼も、不斷云ふ、赤熊だことの、臙臙臙だことの、渾名を止めて、浦島だ、浦島だ、言うたもんで。俺も日本橋に龍宮が在る、と思つたですが。其の筈ですだね。鯨に乗つて泳ぎ込む程の不思議で無うて、熊がお孝と對座に、稲葉家の長火鉢の前に胡坐組めますまい。

見得は言はねえですぞ。國手の前だ。

死んだ媽は家附きで、俺は北海道へ出稼中、堅氣に見込みを付けられて、中ぐらるな身代へ養子に入つた身の上だね。日の丸の旗を立てて大船一艘、海産物積んで、乗出して、一花咲かせ

る目的でな、小舟町へ商會を開いた當座、比羅代りの附合で、客を呼ぶわ、呼ばれもしたので、一座に河岸の人が多かつたでな。土地の藝者も顔が揃うた。二三度、其の中に、國手、お前も因果は遁れぬ、御存じです、瀧の家の清葉とな、別嬪が居たでねえですか。」

葛木は吃と見る。

「容色は固より、中年増でも生娘のやうな、あの、優しい處へ俺目を着けた。一睨、床の間から睨んだら、否應はあるまい哩。あ、爰が俺臆胸の悲しさだ。金に成る男のぬくとみにや、誰でも帯を解く、と奥州、雄鹿島の海女も、日本橋の藝者も同じ女だと、北海道釧路國の學問だいな。」

——吃驚したです、お前……唯居りや袖も擦合ふけれども、手を出すと、富士の山の天邊あたりまで、スーと雲で退かれたで、あつと云ふと俺、尻餅を搗いたです。

(御守殿め、男を振るなんて生意氣な、可、清葉さんが嫌つた人なら、私が情人にして遣らう。

……)

此で國手。其こそ悪く傍へよると、撥で打たれるぞ、と友達の衆に用心された其のお孝が、俺の手を曳いて抱込んだでな。いや、お孝と来ては、對手の清葉を驚かすためには、裸體で本當の麗にも乗兼ねえですが。——後で聞くと、清葉を口説いて振られたと云ふために、お孝の關係

をつけたのが、一人二人でねえと云ふだで喃。」

葛木は聽いて、

「私も御多分には漏れんのだぜ。」と、靜に衣兜に手を入れる。

赤熊は星が痛さうに、額を確と兩手で蔽ひ、

「處が、然うで無い。調子が違うた。……誰も其のかはり、お孝の口から、(可厭に成つたら、其ツ切、御免なんだよ、可いかい)と初手に念を推されて居るで、突出されて謂ふ理窟は無いだね。」

そりや、随分俺が身だけでは金も使つた。けれどもな、練や數の子の二庫二庫、あれだけの女に掛けては、吹矢で孔雀だ。富籤だ。マニラの富が當らんとつて、何國へも尻の持つて行きやうは無えのですもの。

が、人情は理窟で無いで。

女房も生命も、其の生命から二番目の一人の小兒を棄ててまでも……」

「一寸……」

葛木は急に遮りつ、

「唯聞いては居られない、……お互に人の兒だよ。お前、小兒を捨てつたと云ふのは？ 構ひつ

けない、打棄つてあると云ふ意味なのかい。」

「然うでねえです。」

「人に遣つたと云ふ事かね。」

「違ふ。」と、ぶつきらぼうに言ふ。

「棄子をしたか。」

と小さな聲。

頭を釘

六十

赤熊は、準弱として、頹然と俯向いたが、太く恥ぢたらしく毛皮の袖を引搜すと、何か探り當てた體で、むしやりと噛む。

葛木は眉を擧めて、

「一寸、小兒も小兒だし、……前刻から、氣に成るが、兎に角、色事の達引中だ、なあ、まあ。……それに、那樣事をしては不可いぢやないか。見て居られない、……何を食ふんだ。」

「はあ、此かね。」

と、食つた後の指を撮んで、けろりとした顔を上げて、氣も無い様子で、

「虱だと思つたかね、へ、違ふですが。大丈夫だで、國手。脂の抜きやうが足りんだつた處へ、寝るにも起きるにも腕がねえもんで、こりや、雨な、埃な、日向な、汗な、膏で熊の皮に湧いた蛆だよ。」

「え。」

「蟲ですがい。豪く精分の強い、補劑に成る奴で、喃。」

傳吾は厚ぼつたい口を垂離と開けつ、

「此が有るで、俺、此の頃では、一日二日怠けて飯食はねえ事あるですけれども、身體が弱らん。却つて、ほかく、温だね。取つちや食ひ、取つちや食ひするだ。が、あとからく湧くです哩。」

二十間の毛皮を縫包みにして居るで、形のある中は蟲が湧くですだ。」

葛木は面を背けて、はつと吐かうとした唾を、清葉の口紅と、雛の思出、控へて手巾を口に當てた。

——やがて、お孝が狂氣に成つたも、一つは此の蟲が因である——

「貴下、何をして居らるゝかね。」

靴を忍んで唐突に、づか／＼と寄つて聲を沈めたのは巡査であつた。
一寸談話を。」

葛木は爾時まで、蟲に背けた面を向ける。と、星に照らして、

「や、國手ですか。」

「お、貴官で。」

「此の橋は妙な橋ですな。」

と莞爾しながら、角燈を衝と向ける。其處に背後むきに蹲んだ奴。

「此方は、」

「舊友です。ふと此處で出會つたんです。」

「お話しなさい……失禮しました。」

「あゝ、貴官、いづぞやは——一度、更めてお目に掛りたいと思つて居ます。」

「難有う。機會を待ちます。」

と銀河を仰ぎ、佩劍の秋蕭殺として、鵲の如く黒く行く。橋冷やかに、水が白い。

「夜が更ける……おい、そして、そして小兒は。」

「國手、臍腑から餌を吐くまで何事も打ましたで、小兒を棄てた處を言ふですれど、此だけは内分に願ひたいでね、極ねえ。……巡査にでも知れると成らんですだ。」

「餘り、巡査に遠慮する風でもあるまいぢやないか。」

「然うでねえです。河岸の腸拾ひや、立ん坊は大事無いですれど、棄子が分ると引つばられるでね、獄へ入れられる。其も可えですが、唯、然う成ると、縁の下からも、お孝の聲が聞かれんですだよ。」

葛木は思はず吐息した。

「無論言ひはせん。」

「なら話すがね、小兒を棄てたのは、清葉の門だで。」

「何、清葉の。ぢや、あの瀧の家で拾つて、可愛がつてると云ふ小兒は、お前のかい。」

「小兒は幸福ですだ。」

「むゝ、幸福だ。」

と引入れられて、氣を取られた調子が高く、

「清葉が、頬摺りしたり、額を吸つたり、……抱いて寝るさうだ。お前、女房は美しかったか、綺麗な兒だつて。あゝ、幸福な兒だ。可羨しいほど幸福だ。」

摺つて出るやうに水を覗く、と風が冷かに面を打つ。欄干に確と兩手を掛けた、が、熟と黙つて、やがて靜に立直つた時、醉覺の顔は蒼白い。

「私は馬鹿だよ。……もし私を、假にお前の境遇に置いたとすると、其のくらゐな智慧も分別も決して無いのだ。お前は私より知識がある、果斷がある、……飯のかはりに、鬮の毛の蟲を食つても、其れほど智慧があり、果斷もあれば、話は分らう。」

大分遅い、……今度の巡查は此のまゝには通らんぞ。さあ、早い處を言へ。

お前の要求は肯入れられない、二人は斷じて縁を切らない……」

半ば聞いて赤熊は又頹然とした。

「然う言つたら、お前は何うする、私を殺すか。」

「……………」

「お孝を殺すか。」

「えゝ、あれが殺せますほどならです、お前さんに、手向ひするだ。殺したい、殺したい、殺して死にたい思つても、傍へ行きや、ぼつと佳い香のするばかりで、筋も骨も萎々と、身體がは

や、濕つた粘のやうに成りますだ。」

「チヨツ、確乎しないのか。お孝に手出しが出来なかつたら、切めて私を殺す、私を狙ふ計畫を立ててくれ。勇氣を起せ、張合を附ける。私が頼む。そして私にお前の言分を刎つけさせてくれないか。私も頼む、其の様子ぢや霽を引擱んで突返すやうで、斷るに斷り切れない。……こんな弱つた事は無いのだ。」

おい、男がものを言掛けるには、若しそれが肯入れなかつたら何うする、と覺悟を極めてかゝるのが法だ。……恥を知れ、恥を知れ。氣を判然して出直して、切物か、刃物の齒ごたへのあるやうにして、私に斷然、（女と切れない。）と言はしてくれ。」

葛木が焦れて氣色ともに激しく成るほど、はあゝと呼吸を内に引いて、大息で喘いだ、が、獸の背の、波打つ體に、くなくと成ると、とんと橋の上へ、眞俯向けに突伏して了ふ。

「お願ひです、拜むです。……邪魔ならば、縁の下へ突込まれうで。柱へうしろ手に縛られて居ながらでも、お孝の顔を見て居たい、便所の掃除でも何でもするだ。活動寫眞で見たですが、西洋は羨しい。女の足を舐めるだあもの。犬に成つても大事ねえだ、香が嗅ぎたい、顔が見たい、此の通り拜むだ、國手。恥も、外聞も、お孝があつての上です。……」

わつと云ふと、聲を上げて、ひくく後を引いて泣く。

葛木は踵を刻んで、

「聞け、聞け。だが何にも言ふことが出来ない。……では、お前、私がいれば、お孝は確にお前に戻るか、其の、お前に、お孝が戻ると思ふのかよ。」

「そりや、そりや戻つても戻らなくても、國手があるより増だでね、聲だけ聞くでも姿だけ見るでも、國手と二人の時とお孝一人の時とは、俺が心持が何う違ふか考へずとも分るだでね。拜むですだよ。何も言はんで。……此、此の橋板に摺付けて血を出して願ひたいども、額の厚ぼつたい事だけが、我が身で分る外何にも分らん。血の出ないのが口惜いです。」と頭を釘に、線路の露の鐵を敲く。

學士はフイと居なく成つた。銀河のあたり、星が流るゝ。

露霜

六十二

はつと聲に出して、思はず歎息をすると、浸む涙を、兩の腕。……面を犇と蔽うて居た。俤の上で——もう夜半二時過。

此の辻車が、西河岸へヌツと出たと思ふと、

「あゝ。」
葛木は慌しく聲を掛けた。

「一寸待て、車夫。」

「へい〜。」
「忘れものをして来た、歸つてくれないか。」
「唯今、乗した處へ。」

「あゝ。」
夜延仕でも、達者な車夫で、一もん字に其の引返す時は、葛木は伏せた面を擧げて、肩を聳かす如く瘦せた腕を組みながら、切に飛ぶ星を仰いだ。が、夜露に、痛いほど濡れたかして、顔の色が眞蒼であつた。

「可し、此處で——此處で——此處で——」
と焦つて、壓へて云ひ、早や飛下りさうにしつゝも驅戻る發奮につか〜と引摺られるやうに町の角を曲つて、漸と下立つた處は、最う火の番を過ぎて、お竹藏の前であつた。
直ぐに稻葉家の露地を、ものに襲はれた體に、慌しく、其の癖、靴を浮かして、蹠音を密めて、

したくと入ると、門へ行つた身を蹴して、柳を透かしながら、聲を忍んで、二階を呼んだ。
「お孝さん、……」

寂然として居たが、重ねて呼ぶのに氣を兼ねる間も無く、雨戸が一枚、すつと開いて、下から映す蒼い瓦斯を、逆に細流を浴びた如く濡萎れた姿で、水際を立てて、其處へお孝が、露の垂りさうに艶麗に顯れた。

が、其は浴びるばかりの涙なのである。

唯、見る時、葛木も面にはらくと柳の雫が、押へあへず散亂る。

今宵は三度目である。宵に来て、例の如く河岸まで送られて十二時過に歸つた時は、夢にも思ふとは知らなかつた。——石橋で赤熊に逢つて、浮世を思捨てるばかり、覺悟して取つて返した時は、もう世間も此處も寐靜まつて居た上に、お孝は疲れた、そして酔つても居た。……途中送る折も、送る女が、送らる、男の肩に、なよよと顔を持たせて、

「邪慳だね、歸るなんて。」

ぐつすり寐込んだに相違ない。え、決心は鈍らうとも、まよよ、此の次に、と一度引返さうとして、たゞ、口ずさみのひとりでに、思はず、

「お孝……」

と呼ぶと、

「あい。」と聲の下で返事して、階子を下りるのがトンくと引摺るばかり。日本の真中に、一人、此の女が、と葛木は胸が切つたのであつたが。

暖い闇も、石の如く、砥の如く、冷たく堅く代るまで、身を冷して涙で別れて……三たび取つて返したのが此時である。

お孝は、亂書の假名に靡く秋風の夜更けの柳にのみ、ものを言はせて、瞳も頬も玉を洗つたやうに、よろくと唯俯向いて見た。

「濟まないがね、——人形を忘れたから。」

「はい。」

と清く潔い返事とともに、すつと入ると、向直つて出た。乳の下を裂いたか、とハツと思ふ、鮮血を滴らすばかり胸に据ゑたは、宵に着て寝た、緋の長襦袢に、葛木が姉の記念の、あの人形を包んだのである。

ト片手ついたが、欄干に、雪の輝く美しい白い蛇の絡んだ俤。

「お怪我の無いやう……御機嫌よう。」

とはらりと落とすと、袖で受けたが、さらりと音して、縮緬の緋のしぼは、鱗が鳴るか、と地に

這つて、潰島田の人形は二片三片花を散して、枝も折れず、柳の葉末に手に留んぬ。

「清葉さん、——然やうなら。」

カタリと一幅、黒雲の鎖したやうな雨戸が閉つて、……

——露地の細路、駒下駄で——

と心悲しい、が訝えた聲。鈴を振る如く、白銀の、あの光、あけの明星か、星に響く。

葛木は五體が窶んだ。

稻荷堂の、背裏から、もぞくと這出して、落ちた長襦袢に掛つて、兩手に攔んだ、葛木を仰

ぎ見て、夥多たび押頂いたのは赤熊である。

車夫の提灯が露地口を、薄黄色に覗くに引かれて、葛木はつかくと出て、驟然と乗ると、楫を上る。背に重量が掛つて、前へ突伏すが如く、胸に抱いた人形の顔を熟と視た。

彗星

六十三

其の翌年の春である。日本橋三丁目の通の角で、電車の印を結んで、小兒演技の忠臣義士を煙

に巻いて、姿を消した旅僧が、胸に掛けた箱の中には、同じ島田の人形が入つて居たのである。

生理學教室三味の學士も、一年ばかりお孝に馴染んで、其の仕込みで、一寸大高源吾ぐらゐるは玩ぶことが出来たのである。

却説、葛木法師の旅僧は遠くも行かず、何處で電車を下りて迂廻したか、多時すると西河岸へ、船から上つた如く飄然として顯れて、延命地藏尊の御堂に詣でて禮拜して、飲酒家の伯父さんに叱られたやうな形で、あの賓頭廬の前に立つて、葉山繁山、繁きが中に、分けのぼる峰の、月と花。清葉とお孝の名を記にした納手拭の、一つは白く、一つは青く、春風ながら秋の野に葛の裏葉の翻る、寂しき色に出でて戦ぐを見つ、去るに忍びぬ風情であつた。

茶を振舞つた世話人の間に答へて、法體は去年の大晦日からだ、と洒落で無く眞顔で云ふやう、「いや、夜遁げ同然な俄發心。心よりか形だけを代へました青道心でございます。面目の無い男ですから笠は御免を蒙ります。……何處と申して行く處に當は無いので、法衣を着て草鞋を穿くと、直ぐに兩國から江戸を離れて、安房上總を諸所経りました。……今日は、薬研堀を通つて此方へ。——今度は日本橋を振出しに、徒歩で東海道に向ひますつもり。——以來は知らず、何處へ參つても、此のあたりぐらゐる、名所古蹟はございませんな。」と云つて、ほろりとして、手を舉げて茶盆を頂いて出て行く。

人足繁き夕暮の河岸を、影のやうに、すたくと抜けて、それからなぞへに橋に成る、向つて取附の袂の、一石餅とある淺黄染の暖簾を潜つて、土間の縁臺の薄暗い處で、折敷装の赤飯を一盆だけ。

其辭、新しい銀貨で釣銭を取つて一石橋へ出た。もう日が暮れたのである。

半ば渡つた處、御城に向いた、欄干に、松を遠く、船を近くイんで、凭掛つたが、熟として頬杖を支いて、人の往來も世を隔てた如く、我を忘れた體であつた。

「然やうなら。」

と一言掛けて、發奮むばかりに身を翻すと、其處へ、ズンと來た電車が一輛。目前へカラくと打つかりさうなのに、あとじさりに壓され、壓され、煽られ氣味に踰々々と成つた途端である。

「火事だ、火事だ。」

把手を控へて、反身に成つた車掌が言つた。其の帽の、庇も顔も眞赤である。

黒い水の、箱を溢る、ばかり、乗客は總立ちに硝子に犇めく。

驚いて法師が、笠に手を掛け、振返ると、龜甲形に空を劃つた都會を裝ふ、鎧の如き屋根を貫いて、檜物町の空に燦と立つ、偉大なる彗星の如き火の柱が上つて、倒に迸る。

「瀧の家だい。」

其の見當とも言はず、……殆ど直覺的に、清葉の家を、耳の傍で叫んで、——前刻から橋の隙に腰を板に附いて蹲んで居た、土方體の大男の、電車も橋も搔退けるが如く、兩手を振つて驅出したのがある。

旅僧は、其の聲を、聞いたやうだ、と思つたらう。しかし其の時、籠の皮は着て居なかつた。

此は、清葉とお千世が、此の日、稻葉家へ入らうとして、其の露地から出て、二人を見て逃げるのを知つた、のツそり頬被をした晝の影法師と同じ風體の男である。

綺麗な花

六十四

「危えッ！」

危え、と藏の屋根から、結束した消防夫が一人、棟はづれに乗出すやうにして、四番組の纏を片手に絶叫する。

其の下に、前と後を、おなじ消防夫に遮られつ、口紅の色も白きまで顔色をかへながら、か

かげた片棲、跣足のまゝ、宙へ乗つて、前へ出ようと身をさせるのは清葉であつた。

「放して、放して。」

此の土藏一つ、細い横町の表から引込んだ處に、不思議なばかり、白磨の千本格子がびたりと閉つて、寂靜つたやうに音もしないで、たゞ軒に掛けた瀧の家の磨硝子の燈ばかり、瓦斯の音が轟々と、物凄いな音を立てた。

「藏は大丈夫だ。姉さん、危い。」と又屋根から呼ばはる。

取巻く、人数が、

「退いた、退いた、退いた。」と叫ぶ。

薄藤色の出の衣服の、肩を揉んで身をさせる、火の粉は紅梅の如く衣紋を切つて散るのである。

「藏ぢやない、藏の事なんかぢやないんだよ。」

「箆筒は出したい。出来るだけ出した。」

「内の人たち。」と、清葉は最う聲が洩れる。

「乳母は、湯に入つて居た處だ、裸體で遁げた。」

「娘さんも小婢も遁がした。下女どんは一所に手傳つた。」

「何しろ火が疾い。然も火元が裏家の二階だ。」

と口々にがや／＼言ふ。

「其の二階におつかさんが。」

「何、阿母が。」

「坊やが、坊やが。放して、放して。」

と云ふと、思はず壓へたのが手を放す。

「了つた。」と屋根で喚く。

二人ばかりドンと出て格子戸に立つたのは、飛込まうとしたのでは無い。血迷ふばかりの、清葉を遮つて、突戻すためであつた。

清葉は、向うから突戻されてよろ／＼と、退ると、唧筒の護謨管に裳を取られてばつたり膝を、其の消えさうな雪の頸へ、火の粉がばら／＼とかゝるので、一人が水びたしの半纏を脱いで掛けた。

此の折から、此處の横町を河岸へ出る、角の電信柱の根を攀ちて、其處に積んだ材木の上へ、すつくと立つて顯れた、旅僧の檜木笠は、兩側の屋根より高く、小山の如き松明の炎に照されたが、群集の肩を踏まないでは、水管の通つた他に、一足も踏込む隙間は無かつたのである。

「手向の水だい。」

其處に絶望の聲を放つと、二條ばかり、筒先を格子に向けた。

どどどと鳴る音と共に、軒の瓦は、人魂の如く屋根へ飛ぶ。格子が前へどんと倒れる。地獄の口の開いた中から、水と炎の渦巻を浴びて、黒煙を空脛に踏んで火の粉を泳いで、背には清葉の纏しい母を、胸には捨てた(坊や)の我兒を、大肌脱の胴中へ、お孝が……葛木に人形を包んで投げたを拾つて持った、緋の長襦袢を細からげにぐい、と結んで、

「おう！」

とばかり呻つて出たのは赤熊である。

「助かつた。」

「助けた。」

錦の帯は煙を拂つて、龍の如く素直に立つ。母は其の手に抱寄せられた。

「坊や。」

と清葉が手を伸した時、炎の流は格子戸の例れた穴を、堰を切つた堤の如く、九ツの頭を立てて漲り流る。

「まあ、綺麗に花が咲いた事。」

一町、中を置いた稲葉家の二階の欄に、お孝は、段鹿子の麻の葉の、膝もしどけなく頬杖して、宵暗の顔ほの白う、柳涼しく、此の火の手を視めて居た。……

振向く處を

六十五

「此の勢だ、此の勢だ。」

人雪額打つ中を、まるで夢中で、

「人一人助けただ。此の勢なら殺せるだ。お孝、畜生。」

眼は火の如く血走りながら、厚い唇は泥の如く緊なく緩んで、ニタ／＼と笑ひ乍ら、足許ふらふらと虚空を睨んで、夜具包み背負つて、ト轉倒がる女を踏踏ぎ、硝子戸を立てて飛ぶ男を突飛ばして、ばた／＼と破つて通る。

「此の勢だ、殺せるだ。」

火の盛なる頃なれば、大膚脱ぎを誰一人目に留る者も無く、のさ／＼と墓の歩行みに一町隣の元大工町へ、つツと入ると、火の番小屋が、あつけに取られた體に口を開けてポカンとして、

散敷いた櫻の路を、人の影は流る、やう。……半鐘の響、太鼓の音、ぱつ／＼と燃ゆる音、べらべらと煙の響、もの音ばかり凄じく、兩側の家は唯、黒い墓の如く、寂しいまでにひそまり返つて、唯處々、廂に眞赤な影は、其處へ火を呼ぶか、と凄いのである。

洪と鳴つて新しい火の手が上ると、魔が知らすやうな激しい人聲。わつと喚いて此の町も危く成つたが、片側の二階からドシ／＼と投出す、衣類、調度。

ト諸君はお竹藏と云ふのを御存じの筈と思ふ。あの屋根から、誰が投げて、何のからくたに交つたか、二尺ばかりの蠟鞘が一口。蛇の如く空に躍つて、丁ど其處へ來た、赤熊の額を尾でた、いて、ハタと落ちた。

發奮で打つたか。前刻瀧の家の二階で受けた怪我の、氣の勢で留まつて居たか。此の時、額から垂々と血が流れたが、其には構はないで、殆ど本能的に、胸へ抱いた年弱の三歳の子を兩手で抱へた。

が、慌しく刀を拾ふと、何を思ふ隙も無ささうに、キラリと冷かに抜いて、鞘を棄てて提げたのである。

其のまゝ、襲入つた、向うの露地口には、八九人立したが、眞中をつつと通るのに、誰も咎めたものが無い。

柳に片手を、柄下りに、抜刀を刃尖上りに背に隠して、腰をついと伸して、木戸口から格子を透かすと、丁ど梯子段を錦繪の抜出したやうに下りて、今、長火鉢の處に背後向きに、すつと立つた、段染の麻の葉鹿の子の長襦袢ばかりの姿がある。

がらりと開けると、づか／＼と入るが否や、

「畜生！」

振向く處を一刀、向うづきに、グサと突いたが脇腹で、アツと殆ど無意識に手で疵を抑へざまに、弱腰を横に落す處を、引なぐりに最う一刀、肩さきをかツと當てた、が、それは引かき疵に過ぎなかつた。刃物の鍛は生鐵で、刃は一度で、中じやくれに曲つたのである。

「姉さん、——」

蟲が知らしたか、もう一度、

「お爺さん。」と呼ぶと齊しく、立つて逃げもあへず、眞白な腕をあはれ、嬰兒のやうに虚空に投げて、身を悶えたのは、お千世ではないか。

赤熊は今日も附狙つて、清葉が下に着た段鹿子を目的に刃を當てた。

このお千世の着て居たのは、しかし其では無く、……清葉が自分のを持して寄越したのであることを、此處で言ひたい。

「一寸、お茶を頂きに。」

清葉の眉の上つたのを見て、茶の罐をたたく叔母なるものは、香煎でもてなすことも出来ないで、陰気な茶の間が白けたのであつたが。

あはせかゞみ

六十六

「これは、入らつしやいまし。」

其處へ、お千世に介抱されつゝ、二階から下りて来たお孝が、儀式正しく、びたりと手を支いて挨拶をした。肩の位に、大客を恐れない品格が備はつて、取亂した人とは思はれなかつたが、清葉も改めて會釋をする時、其は誰にするのやら分らないことを悟つた。

「入らつしやいまし。」

今度は澄まして在らぬ方の、店を向いて手を支いたのである。

「お孝さん、分りますか。」

清葉は聲を曇らしながら、二階で弄んで欄干越、柳がくれに落したのを、袖で受けて膝に持つた、銀地の舞扇を開いて立つて、長火鉢の向う正面に、縁起棚の前にきらりと翳すと、お孝が、肩を落して、仰向いて見つゝ。

「お月様でせう。——大事のお月様雲めがかくす。——とても隠すなら金屏風で、」

と唄ふかと思へば、

「おゝ、寒い、おゝ寒い、もう寝ようよ。」と身ふるひをする。

お千世が、其の膝を抱くやうに附添つて、はだけて、乳のすくお孝の襟を、搔合せ、搔合せするのを見て、清葉は座にと着きあへず、扇子で顔を隠して泣いた。

背後へ廻つて、肩を抱いて、

「お大事になさいよ、静にお寝みなさいまし、お孝さん、一寸お千世さんを借りますよ。——お座敷にして。」

と顧みて、あとは阿婆に云つた。

「から、意氣地も、だらしも有りませんやね、我まゝの罰だ、業だ。」

と時々刻んで呟いた阿婆が、お座敷と聞くと笑傾け、

「そらよ、お千世や、天から降つたやうな口が掛つた。さあ、着換へて。」

直ぐに連れて出ると心得た阿婆が、他には無い、お孝の亂心にゆかしがつて着て居た、其の段鹿子を脱がせようと、お千世が遮る手を拂つて、いきなりお孝の帯に手を掛けて、かなぐり取らうと爲たのである。

「叔母さん、まあ、」

とお千世はおろく……

「失禮をいたします。」と、何の事やら又慇懃に、お孝が、清葉に手を支いたのは涙ならずや。

「これが可厭なら、よく稼いで、可い旦那を取つてな、貴女方を、」

と、清葉を頷、

「見習つて幾枚でも拵へろ、其處を退かぬかい。」と突退ける。

「お待ちなさいまし。」

凜と留めて、

「切火を打つて、座敷へ出ます、藝者の衣物を着せるには作法があるんです。……お素人方には分りません、手が違ふと怪我をします。貴方、お控へなさいまし。——千世ちゃん、今（箱さん）を寄越すから、着換へないでいらつしやいよ。姉さんを氣をつけて。お孝さん、何もしらぬ横を向いたお孝に、端正と手を支いて、

「然やうなら。——二人で、一度あはせものをしませうね。」

と目を手巾で押へて歸つた。……

襦袢は故と、膚馴れたけれど、同一其の段鹿子を、別に一組、縞物だつたが對に揃へて、其は小女が定紋の藤の葉の風呂敷で届けて來た。

箱屋が來て、薄べりに、紅裏香ふ、衣紋を揃へて、長襦袢で立つた、お千世のうしろへ、と構へた時が、摺半鐘で。

「木の臭がしますぞ、近い。」

と云ふと、箱三の喜平はひよいと一飛。阿婆も續いて驅出した。

お千世の斬られた時、衣物は其處に其のまゝである。

振袖

六十七

「違つた、お千世だい。」
と、矢張りニタ／＼と笑ひながら、目を据ゑて階子段を見上げた時。……あゝ、一足遅矣。

お千世の祖父の甚平が臺所口から草鞋穿の土足である。——此が玄關口から入つたら、或は恠うは無かつたらう。——爺さんは、當夜植木店のお藥師様の縁日に出了た序に、孫が好きだ、と草餅の風呂敷包を首に背負つて、病中ながら豫て抱主のお孝が好いた、雛芥子の早咲、念入に土鉢ながら育てたのを丁寧に両手に抱いて、来て、途中頭の上の火事に慌てながら、驚破や見舞、と驅込んで、臺所口へ廻つたのが、赤熊と一足違ひ。

泥鉢は一堪りも無く踏潰された。恰も甚平の魂の如くに挫けて、眞紅の雛芥子は處女の血の如く、めらめらと颯と散る。

熊は山へ歸る體に、のさ／＼と格子を出た。

ト、敵を追つて捕へやう擬勢も無く、お千世を抱いて、爺さんの腰を抜いた、其の時、山鳥の翼を弓に番へて射る如く、颯と裳を曳いて、お孝が矢のやうに二階を下りると思ふと、

「熊の蛆め、畜生」と追継つて衝と露地を出た。

が、矢玉と馳違ひ折かさなる、人混雜の町へ出る、と何しに來たか忘れたらしく、こゝに降かかる雨の如き火の粉の中。袖でうけつゝ、手で招きつゝ、

「花が散るよ、散るよ。」

と蹴出しの淺黄を踏く、其の紅を捌きながら、する／＼と着衣を曳いて、

「お、冷い、お、冷い。……雪やこんこ、霰やこんこ。……お、綺麗だ。花が散るよ、花が散るよ。」

仲通の小紅屋の小僧は、張子の木兎の如く、目を光らして一すくみに成つた。

火の影ならず、血だらけの抜刀を提げた、半裸體の大漢が、途惑した幟の繪に似て、店頭へすつくと立つと、會釋も無く、持った白刃を取直して、切尖で、つぶりと其處にあつた林檎を突刺し、敵將の首を擧げたる如く、づい、と掲げて、風車でも廻す氣か、肌につけた小兒の上で、くるりくるりとかざして見せたが、

「あは、。」と笑ふと、ドシンと縁臺へ腰を掛ける、と風に落ちて來る燃えさしが人よりも多い火の下の店頭で、澄まして林檎の皮を剥きはじめた。

小僧は土間の隅に宛然のからくり。お世辭ものの女房が居たらば何と云はう。其は見えぬ。

「坊主、咽喉が乾いたらうで、水のかはりに、好きなものを遣るぞ。お、女房に肖如だい。」

ニヤ／＼と又笑つたが、胡瓜の化けたらしい曲つた刀が、剥きづらかつたか、あはれ血迷つて、足で白刃を、土間へ壓當て踏延ばして、反を直して、瞳に照らして、持直す。目の前へ、すつと來て立つたのはお孝である。

「刀をお貸し。」

黙つて袖口を、なぞへに出した手に、はつと、女神の命に従ふ狀に、赤熊は黙つて其の刀を渡した。

「お、嬉しい、剃刀一挺持たせなかつた。」

と、手遊物のやうに二つ三つ、睫を放して、ひらりと振つた。

眦を返す、と亂る、黒髪。

「覺悟をおし。」と、澄まして一言。

何か言ひさうにした口の、唯またニヤ／＼と成つて、大な涎の滴々と垂る、中へ、素直につきんと刺した。が、齒にカツと迂つて、唇を決明果の如く裂きながら、咽喉へはづれる、其の眞中、我と我が手に赤熊が兩手に握つて、

「うゝゝ、うゝゝ……抉れ、抉れ、抉れ、抉れ。」

懷中をころがる小兒より前に、小僧はべた／＼と土間を這ふ。

「了つた。」

手を壓へたのは旅僧である。葛木は、人に揉まれて、脱け落ちた笠のかはりに、法衣の片袖頭巾めいて面を包んだ。

「お孝さん。」

「先生。」

と、忘れたやうに柄を離すと、刀は落ちて、赤熊は眞仰向けに、腹を露骨に、のつと反る。

お孝の彼を抉つた手は、こゝに唯天地一つ、白き蛇の如く美しく、葛木の腕に絡つて、潜々と泣く。

葛木は尙ほ絶る袖をお孝に預けたまゝ、跪いて悶絶した小兒を抱いた。

驅着けた警官の中に笠原信八郎氏が有つた。

「葛木……更めてお目にかゝります。……見苦しくなく支度をさせます。此女の内までお見免しが願ひたい。」

「諸君。」

信八郎氏は言下に云つた。

「私が責を負ひます。」

警官は二隊に分れた。

お孝は法衣の葛木に手を曳かれて、静々と火事場を通つた。裂けた袂も、宛然振袖を着た如くであつた。

火の番の曲り角で、坊やに憧れて來た清葉に逢つた。

「あゝ、お地藏様。」

夢かとはかり、旅僧の手から、坊やを抱取つた清葉は、一度、繼母とともに立退いて出直したので、凛々しく腰帯で端折つて居た。

お孝は、離さじ、と唯黙つて葛木に縋る。

「や、此處にも一人。」

警官は驚いた。露地の出口の溝の中、さして深くも無い中に、横倒れに陥つて死んで居たのは茶罐婆で、胸に突疵がある。儲は赤熊が片附けた。

此が爲に、護送の警官の足が留つて、お孝は旅僧と二人、可憐しさうに、葉が差覗く柳の下の我家に歸る。

清葉の途中で立停つたのを見て、お孝が判然とした聲で云つた。

「姉さん、遺言を聞いて下さい。」

「はい。」

と答へた。二人は柳の軒燈に、清葉は其時、羽目について暗く立つた。

「お孝さん、藏も今しがた落ちました。」

と云つて、實際目ぬりが届かないで、助つたつもりで、中には能衣装までであると傳へた。が

開いたのであつた。

坊やを胸に、すつと出て、

「身に代へまして、清葉が、貴女に成りかはつて。」

其時三人が皆泣いた。

「お千世さんは、」

「あゝ、お千世。」

餘りの事に呆果てて、三人は茫然とした。中にも旅僧は何をトツチたか、膝で這廻つて、雛芥子の散つた花片の、煽で動くのを、美しい魂を散らすまいとか、胸の箱へ、拾ひ込みくしたのである。

信八郎氏が先づ一人で入つて來た。

お孝は胸に抱いて仰向けに接吻して居た、自分のよりは色のまだ濡々と紅な、お千世の唇を放して、

「お湯を頂きまして可うござんすか、旦那。」

と信八郎氏に手をついて言ふ。

渠は舉手の禮を返して、

「御隨意に、盃をなすつて可い。」

茶棚に背後向きに成つた肩を拊つばかり、ハタと其處へ、縁起棚から輝いて落ちたのは、清葉が、前に翳したまゝ、其處にさし置いた舞扇で。

ふと此に心付いたらしく、立つて頂いて、同じ縁起棚から取つた小さな紙包み、(同妻)の手巾の端を、湯呑に落して素湯を注いだ、が、何にも言はず、かぶりと飲むと、茶碗酒が得意の意氣や、吻と小さな息をした。其の中に黒子を抜いた時の硝酸が入つて居た。

「姉さん、遺言を聞いて下さいな。」

「生命に掛けます、お孝さん。」

其時、舞扇を開いた面は、銀よりも白ずんだ。

お千世は玉の緒を繋ぎとめた。

葛木が、生理學教室に歸つたのは言ふまでもない。留學して當時獨逸にあり。

瀧の家は、建つれば建てられた家を、故と稲葉家のあとに引移つた。一家の美人十三人。

清葉が盃を舉げて唄ふ、あれ聞け横笛を。

——露地の細路駒下駄で——

(寺島製本)

昭和十五年九月十五日印刷
昭和十五年九月二十日發行

鏡花全集第十五卷

著 者 泉 鏡 太 郎

發 行 者 東 京 市 神 田 區 一 ツ 橋 二 丁 目 三 番 地 岩 波 茂 雄

印 刷 者 東 京 市 下 谷 區 二 長 町 一 番 地 井 上 源 之 丞

印 刷 所 東 京 市 下 谷 區 二 長 町 一 番 地 凸 版 印 刷 株 式 會 社

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發 行 所 岩 波 書 店

電話(33)一八七・一八八番
九段(33)一八九・一八〇番
振替口座東京七四四一六番

小店出版物中、萬一不完全な品(落丁・亂丁)等がありました節は、御手数取らずに洩れなく御申出下さる事を御願ひ致します。たとへ御讀後でありましても、早速お取替致します。

798

167

798
167

